
Adult Only
双夢魔のアレンジメント
聖アルルナ女学院②
JAMKINGDOM ✦ UWD



窓際の寝椅子に身をゆだねた少女の白肌を、月明かりが静かに照らしている。

聖アルルナ女学院の生徒らが住まう寮舎。その最上階は、いつからかワンフロアすべてが「黄金の百合十字クラブ」の専有する特別区画となっていた。電子的セキュリティと魔術結界によって完全に警護された秘密の楽園で、クラブに名を連ねたうら若き少女たちは、発情した肢体を絡ませ、寝食を忘れて愛欲を貪り合うのだ。

「ん…ふふ、どうかしら、由佳里。私のおチンポの味も、なかなかのものでしょう…？」

下腹に顔を埋め、ちゅくちゅくと水音を立て熱心に口唇奉仕に励む級友の髪に、楓の気まぐれな指先が踊る。

「ぁむ、んぷ…ぅ、そうねぇ、楓のも…美味しいのは美味しいんだけど、留奈お姉様のチンポミルクと比べちゃうと、いまいち濃厚さが足りないかなぁ…」

「んまっ。そんなこと言う口には、もう飲んでいただかなくても結構よ」

意地悪く微笑んで腰を引いた楓に、由佳里が涎の糸を引きながら追いすがった。

「あぁっ、そんな殺生なこと言わないでよ～。楓の搾りたてのチンポミルク飲まなきゃ、私もう生きていけないんだからぁ～」

わざとらしい由佳里の口ぶりに、常に冷静沈着な楓もつい吹き出してしまう。

「まったく…。調子だけはいいんだから、由佳里は」

「そんなことないって。楓のおチンポが大好きなのはホントだよ。留奈お姉様と楓――二人の違った味のチンポ汁をこうして味わえるようになって、私たち幸せものだなぁ…って言いたかったの♡」

飼養母が産出する極上の霊薬を摂取し続けることで、楓は本来の、両性具有の姿を取り戻しつつあった。今のところは肉茎だけだが、いずれは睾丸も備わって、女体を孕ませることも可能となるだろう。

「んぷ、ぁむ…ぅ、おいひ…ぃ、楓の、おチンポ…♡」

恍惚と瞳を揺らめかせ、肉筒を丹念にねぶり上げる由佳里。その下腹は、臨月の妊婦さながらに膨らんでいる。極太のアナル栓に内蔵されたポンプが、豊潤に分泌される由佳里の母乳を、チューブを通して休みなく注腸し続けているのだ。大量の母乳は糞汁と混じって発酵し、腸管の作用で濃縮され、ヨーグルト状に半固形化する。このおぞましい黄土色の腐粥こそ、飼養母の旺盛な食糞欲を満たすフルコースの一皿である。



「つ…くぁ、い、イク…わよ、由佳里、私の…チンポミルク、たっぷり、お飲みなさい…っ、はぅ…っんくふぅうんぅっっ！」

「ぇあ…は、ぁむ、んぷ…ぅむっ、んぅ…くふぅ…♡」

勢いよく噴き上がった精汁を一滴もこぼさぬよう、口いっぱいに頬張る由佳里。舌で丹念に攪拌しているのだろう、膨れた頬がうねうねと蠢いている。

「はぁ、はぁ…。うふふ…ほら、早く横になりなさいなザーメンの味だけじゃ、物足りないんでしょう？」

その言葉に、たまらなく卑猥な笑みを浮かべた由佳里がうなずき、いそいそと楓の股下に仰向けで寝そべった。ぽっかりと開いた口腔は白濁粘液をなみなみと湛え、追加トッピングを待ち焦がれている。楓はその上にまたがると、級友の口唇を和式便器に見たて腰を下ろした。

「ん…っく、ぅん、はぅ…っンうぅう…っっ！」

隆起した楓の肛輪に、由佳里の口唇がぴったりと重なる。そのまま力強く息むと、なめらかに押し出された糞肉がたちまち由佳里の口中を満たし、溢れた粘液が下顎に幾筋もの白い軌跡を描いて滴り落ちた。

「ん…ぉむ…♡ぅぷ、はむ…んふぅ、ぉふ…うぅ♡」

食糞快楽にもじもじと腰を悶えさせ、充血したクリトリスを痛いほど勃起させる由佳里。精液と糞餡をぐちゅぐちゅと舌で捏ね混ぜて味わうのが、彼女にとって何よりの好物なのだ。

「ふふ…その調子よ、由佳里。ウンチをお腹いっぱい食べて、美味しいヨーグルトをたくさん練り上げてね♡」

満足そうな微笑を級友に投げかけ、おもむろに視線をベッドの上へと向ける楓。その先では、もうひと組の少女たちが、狂おしい淫糞の儀式にいそしんでいた。

「は…ぁあっ、で、出るよ、留奈…っ、はぅ…ン、っく、んぐ…っンくふぅうぅンッッ!!」

いまや餌養母として見事な成長をとげた五月の下腹は、昼夜を通して練り上げられた大量の糞肉を孕み、信じがたいサイズにまで膨張していた。わずかに息んだだけで、胎児ほどもあろうかという超極太糞が、限界を越えて張り詰めた肛唇からモリモリとひり出されてゆく。



「っ…く、うぷ、はむ、ん、ぅ…ンぐ…うっ♡」

五月の尻たぶの直下で、何の躊躇もなく糞肉を頬張ってゆく留奈。咀嚼してキメ細やかな肉質を噛み締め、溢れ出る濃厚な腸汁を味わい、あるいは丸呑みにして滑らかな喉ごしを楽しみながら、うっとりと瞳を濡らしている。その下腹では、そそり立った巨大すぎる怒張が、食糞の喜悦に先走りの蜜を溢れさせていた。

「あぁ…留奈ったら、おチンポ…こんなにガチガチに固くして…♡ ボクのウンチ、そんなに美味しいの…？」

鼻先に突きつけられた射精口へ、いとおしそうに顔を寄せる五月。その鼻息の感触だけで達しそうになるのを、留奈は白目をむきながらどうにか堪えていた。

「つぐ、ん…っぐ…、うんぅ…、っふぅう…っ！」

夜ごとの淫宴で餌養母が最初にひり出す濃密な聖糞を受けとめるのは、クラブを率いる留奈の特権であるが、同時に留奈はその夜最初の射精、精液のもっとも濃厚なエキスを必ず餌養母の胎内へ種付けする義務を負っているのだ。これを怠れば餌養母の霊性の低下にも繋がりかねない、魔術的にきわめて重要なプロセスである。

「どうか堪えて下さいましね、留奈お姉様。五月様のぐちゅぐちゅおまんこに、おチンポをブチ込めるまで、あと少しの辛抱ですから♡」

楚々とした微笑みを湛えた口唇からアンバランスな淫語を紡ぎつつ、山盛りの糞土を留奈の全身へと塗り拡げてゆく月子。給餌妹である彼女の下腹も、やはり餌養母への供物を腸管いっぱいに蓄え、大きく膨れている。

「うふふ…でも、いつもここが、いちばんお辛いところですわよね。私も、慎重にいかないと…」

「つ、月子…もっと、ゆっくり、あ…はぁあ…っ！」

「分かっております。留奈お姉様の大切なおチンポ汁ですもの。あだやおろそかには、洩らさせませんわ…」

よどみなく流れる月子の指さばきが、留奈の白肌をすみずみまで糞色に染め上げてゆく。乳房や乳首、秘部は特に念入りに、しかし決して留奈が達してしまわぬよう、精妙この上ないタッチで粘膜の内側までも丁寧に塗糞してゆく月子の腕前には、熟練したエステティシャンでさえ舌を巻くであろう。

「――さぁ、お化粧は完了ですわよ、留奈お姉様♡」

狂おしい糞泥愛撫から解放されるときが、ようやく訪れた。糞餡をたらふく平らげ、チョコレートでコーティングされた人形のように全身くまなく粘糞を塗り込められて、文字どおり身体の内と外から餌養母の淫糞エキスを十二分に吸収した留奈。その官能はすでに少女の肉体の限界を振り切って、暴発は時間の問題である。



「さ、五月、もう…私、が、ガマン…できない…っ♡」
「ボクもだよ、留奈…。さぁ、遠慮なく使って♡ ボクの身体…ボクのおまんこの――」
慈愛に満ちた微笑み。五月は留奈の下腹にまたがると、痛々しいまでに勃起した砲身の先端を優しく膣腔にあてがい、根元まで一気に腰を沈ませた。
「――奥の奥まで、ぜんぶ…っ！」
「く…っんはぁあぁぁあンンッ!!」
昂ぶりきった留奈の肉砲の引き金を引くには、たったのひと擦りで充分だった。黄色身がかった濃厚な精汁が、五月の発情した子宮いっぱいに充填される。雌の本能的快楽に震える下腹を撫で、熱く重い粘液がタプタプと波打つ感触を確かめると、五月はひとつ舌舐めずりし、激しいスクワットのように力強く腰を上下させ始めた。
「っはぁ、っく、はうっ、ンはぁあっ！ もっと、もっと注射してぇ！ 留奈の子種、留奈の、チンポミルクぅ！」
「っひ、あ、さ…つき、五月、んぉ…ほおぅううッ！」
膣肉のオナホールが一往復するたび、おもしろいように射精してしまう留奈の姫茎。壊れた蛇口さながら噴出する大量の白濁液が、甘酸っぱい膣液と混じり合って溢れ、シーツにぐっしょりと水溜りを描いてゆく。

「さ、五月…私にも、五月のミルク、飲ませて…ぇ♡」
立て続けの射精でようやく一息ついた留奈が、五月の豊乳を鷲摑みにした。留奈の淫茎と同様、破裂寸前まで淫乳を蓄えた乳腺から、たちまち高圧の乳汁シャワーが噴き上がる。
「っんく…ぅ、ふぁ、ら…らめえ♡ おっぱい、ひぃんっ、おっぱいで…イッちゃう、っく…ンぉほぉおおッ!!」

餌養母となった五月の乳房は、搾乳のたびに常人の射精の数倍にも達する絶頂感に貫かれることになる。えげつなく肥大した淫熟乳首をプニプニと捏ねくりまわされ、留奈の容赦ない口唇に吸引されながら、五月は夢のような淫悦に身も心も蕩けさせていた。
「んく、ぁむ、っんぐ、はむ、んく…っうぷぅ♡」
さんざん射精した分の体液を補おうというのか、まとめて咥えこんだ左右の乳首からゴクゴクと母乳を飲み干す留奈。乳房に顔をうずめたあどけない瞳は幼子そのもので、五月は胸の奥に沸きあがった母性愛に導かれるまま、愛しい少女の背中を優しく抱きしめていた。
「ひ…ぁ、はぅ…んっ♡ 留奈、かわいい留奈…♡ ボクのおっぱい、美味しい？ たくさん飲んでね、お腹がいっぱいになるまで、留奈の、好きなだけ…♡」



淫靡きわまりない聖母娘像を横合いから見つめていた由佳里が、羨ましそうに鼻を鳴らした。
「あぁ～ん、いいないいな、留奈お姉様ばっかり♡私も五月様のおっぱい飲んで、なでなでされたいよ～」
「ふふ…由佳里はまだおあずけよ。まず私のおチンポをちゃんと満足させるのが先でしょ？」
「はぁ…っん、もぉ、楓ってば、ずっと挿れっぱなしで、いったい…何回膣出ししたら、気が済むのよぉ♡」
「まぁ、いいじゃないの。やっと生えたおチンポですもの、私だって思う存分、使いまくりたいのよ♪」
楓はそう言って不敵に微笑むと、とろとろに濡れそぼった由佳里の膣腔へ、あらためて深々と腰をえぐり込んだ。子宮口をこじ開けた亀頭の先端から、もう何度目か分からない白濁汁が脈打ちながら注入されてゆく。
「っはぁ、はぁ…っ♡それに…由佳里だって、おチンポ欲しくてたまらなかったくせに…♡私のザーメンウンチ食べて、おまんこグチョグチョに蕩かせて、クリトリスあんなにガチ勃起させてたじゃないの♡」
「っくは…ぁ、ん…ふふ♡だって、楓のウンチ、甘くて苦くて…すっごく、美味しいんだもの♡」
「またそんな、調子のいいこと言って。どうせ、五月様のウンチには敵わないけど――なんてオチなんでしょ」
「あらあら…？もしかして楓くん、妬いてるの？」
しばし思わせぶりに見つめあった後、楓と由佳里は同時に吹き出した。少女たちにとって餌養母の聖糞があらゆる意味で別格であることは、いまさら確認するまでもない根源的摂理であり、嫉妬の対象にするなどと、冗談にしても馬鹿馬鹿しすぎるのだ。
「ふふ、ふ。まったくもう…由佳里ったら。いいわ、五月様のところにいってらっしゃい。お姉様にさんざん搾られて、そろそろお腹も空かれる頃合でしょう」
「了解っ！私もいいかげんお腹パンパンで、さすがに限界だよ～♡」
おどけた敬礼を楓に投げかけ、うきうきと足取りも軽く五月のもとへ馳せ参じる由佳里。しかしそこにはすでに、可憐な尻たぶを惜しげもなく中腰に割り拡げ、淫猥きわまりない痴態で息む先客の姿があった。
「つ、月子～。そうだった…（がっくり）」
「ん…ぅふ、もうしばらくお待ちくださいね、由佳里お姉様♡五月様には、まず私の…メインディッシュを、召し上がっていただかないと、ぉふ、んぅ…くぅっ！」
留奈に貫かれたまま仰向けに寝かされた五月。食糞を期待してだらしなく開いたその口唇に狙いを定め、皺ひとつなく熟した月子の肛肉が力強く隆起した。
「月子…ちゃん、ぇあ…ぅぐ、んむ…ぅぷう…っ♡」
月子が深々と息むのに合わせ、目を見張るような極太糞がモリモリとひり出されてゆく。芯まで身の詰まった、重量感たっぷりの見事な糞肉大蛇である。
「はぁ…んぅっ、さ、五月…さまぁ、どうぞ、月子のウンチを、心ゆくまで、ご賞味くださいませ…ぇ♡」

その名の通り、糞肉を餌養母に供するのが給餌妹の役目だ。腸管にはおぞましい秘術が施され、人体の限界を越えた大量の糞餡を産み出せるよう改造されている。だがそれでも、月子ひとりの産糞量程度では、五月の並外れた食糞欲の腹八分目にすら届かない。

「はぁ、んぁ…ぅぷ、ぁむ、月子ちゃんのウンチ、おいしい…♡もっと、もっと…ウンチ、食べさせて…ぇ♡」

やがて五月はたいした苦もなく、月子の妊婦腹を膨らませていた糞肉をすっかり平らげてしまった。むしろその味と匂いでスイッチが入ったのか、瞳を妖しく輝かせ、さらなる供物を要求する。

「はぁ、はぁ…っ、も…申しわけございません、五月様。私のお尻の中はもう、これで品切れなんです――」

「ごくろうさん、月子♡ほら、どいてどいて、やっと私の番なんだから♪さぁ、五月様、お待たせしました！次はこの由佳里の、ミルクたっぷりクリームウンチを、お腹いっぱい召し上がって下さぁい♡」

待ってましたと、由佳里が肉付きの良い尻たぶを割り開き、五月の顔上に腰を下ろす。アナル栓が丸一日ぶりに引き抜かれ、たちまち母乳に漬け込まれた淡い黄土色の練り物が、ぬるりと漏れ出した。

「どうぞ、五月様…♡ん…っくぅふうンぅうッッ！」

「はぁ、はぁっ、由佳里…ちゃん、ぁむ、ん…ぅぐ、おいひ…ぃ、ミルクとウンチが…まざって、すごい匂いだよ…♡甘くて…臭くて、とっても、おいひぃの…お♡」

柔らかく濃厚な汁気たっぷりの糞羹は、まさにデザートといったところか。甘いものは別腹とばかりに、なめらかな果肉を口いっぱいに頬張り、舌で捏ね混ぜ、口どけの良い濃厚なクリームの食感と、溢れ出す乳汁と腸汁の豊潤な発酵臭を、心ゆくまで味わい尽くす。

「っ…はぁ、はぁ、い…いかがでしたか、五月様…」

「ん…ぅぷ、はむ、げぷ…うっ♡」

ようやく食糞欲が落ち着いたのか、糞臭ただよう盛大なげっぷをひとつ漏らし、うっとりと微笑んで舌舐めずりする五月。さすがの餌養母も、妊婦腹ふたつ分の特盛り糞を完食し、腹部をパンパンに膨らませている。



「――ごちそうさま、月子ちゃん、由佳里ちゃん…♡いつもありがとう、ボクに食べさせるために、こんなにたくさん、ウンチをお腹に溜め込んでくれて…。ふたりとも、すごく美味しかったよ…♡」

汚物と恥液に塗れながら、五月の表情にはむしろ神々しいオーラさえ感じられる。聖母と崇める五月から感謝の言葉を賜って、月子と由佳里は至上の歓喜に全身を打ち震わせていた。

「そ、そんな、五月様ったら、もったいないお言葉です。お礼を言いたいのは、私たちのほうですのに…」

「月子の言うとおりですよ、私たち給餌妹は、五月様にウンチを食べて頂けるだけで、これ以上ないほど幸せなんですから――」

身に余る光栄に思わず涙ぐむ月子と、照れくさそうに瞳を伏せる由佳里。愛らしい妹たちへ、五月が手招きして呼びかけた。

「おいで、月子ちゃん。ウンチをたっぷりひり出してくれたお返しだよ。空っぽになったお腹を、ボクのおっぱいで、好きなだけ満たして…♡」
「あ、ありがとうございます、五月様…！」
「嬉しいっ！じゃ、遠慮なくいただきますね～♡」
言うが早いか、飼養母の乳房にむしゃぶりつく少女たち。競うように乳首を吸い上げ、母乳を一心不乱に飲み干してゆく。

「はぅ…くふぅんっ♡た、たくさん飲んで、また…美味しいウンチを、お腹いっぱい、練り上げてね…♡」
とめどない射乳快楽と沸きあがる母性愛に身も心も満たされ、五月は熱く濡れた吐息を漏らすのだった。
「私にもお返しさせて、五月…。お尻の穴から、私のチンポミルク、お腹いっぱい飲ませてあげる…♡」
すっかり蕩けきった五月の肛門に、留奈がその巨根を無邪気に突き立てた。熱くぬかるんだ肉厚の腸壁に包み込まれ、あれほど精を吐き出したはずの肉砲から、しごけばしごくほど新鮮な白濁液がドプドプと溢れ出す。
「っひぁ、あふ…んくぅうぅンンッ！お、お尻の…穴も、気持ち…いいよぉっ、五月、さつき…いぃっ♡」
「はぅ…んくうっ、留奈、すごい…っ、お尻が、チンポ汁で、ふ、ふやけちゃう、んぉ…おほぉおうッッ!!」



張力の限界まで糞餡を詰め込まれたはずの下腹が、大量精液浣腸によってさらにじりじりと膨れ上がってゆく。通常の人体では決して味わえない禁断の淫悦に、五月は白目を剥いて悶絶していた。

「私からもプレゼントですわ、五月様…。どうぞ、私のおチンポ汁で、喉を潤して下さいまし♡」

両乳首を力いっぱい搾乳され、深々と肛管を貫かれて息も絶え絶えな五月の口唇に、楓が淫根を含ませた。

「っうぷっ、ぁ…む、ぅく、んぷ…ぅふぅう…っ♡」

「くふ…んぁはぁッ♡い、いかがですか、五月様…♡私のチンポミルクの味は、お気に召しまして…？」

休みなしの糞宴乱交ですっかり乾いていた五月の喉に、楓の芳しい体液が心地良く染みわたる。

「うぷ…んはぁっ、うん…！楓ちゃんの…おチンポ汁も、すっごく…美味しいよ♡留奈、楓ちゃん、由佳里ちゃん、月子ちゃん——みんなそれぞれ、ウンチやおっぱい、チンポミルクが違う味で、でも…どれもすごく美味しいんだもの。ボク…幸せすぎて、困っちゃうよ…」

「とんでもありません。私たちが浴している恩恵こそ、計り知れませんのに。五月様ほどのお方を飼養母として戴き、お側にお仕えできる——これに勝る幸福など、この世に存在いたしませんわ」

「ん…もぉ、楓ちゃんったら、いつも…大げさなんだから。でも——ありがとう、嬉しいよ…♡」

美しい少女たちの崇拝と敬愛に包みこまれ、五月はとめどない充足感に満たされてゆく自分をひしひしと感じていた。身体中の穴という穴に溢れるまで詰め込まれた愛情の証し——排泄物と淫液は、臨月の妊婦に倍するほど膨れ上がった下腹の奥で、昼夜の熟成の後、飼養母の聖糞へと変性する。そして、次の夜に執り行なわれる糞宴において、再び少女たちへ振舞われるのだ。

この循環システムこそ、「黄金の百合十字クラブ」に無限の魔力を供給する、奇跡の永久機関であった。



双夢魔のアレンジメント

聖アルルナ女学院②

作・ジャム王子

（原案協力・hermit_gel）

登場人物紹介



【黄金の百合十字クラブ】

表向きは「中世民俗学研究会」として
学院の片隅で平穏に活動している、
どこにでもあるような仲良しクラブ。
しかしその実態は、
淫欲と糞悦にまみれた神秘の儀式によって、
霊力を精錬し抽出することを目的とした
禁断の魔術結社である。

四条楓

常に従者のごとく留奈に仕える
二年生。クラブの参謀的存在。

水無瀬五月

三年生。
かつては菖蒲たちとの親交が
深かったが、その類稀なる
霊的素養を見い出され、
クラブの一員となった。
現在は餌養母として、
淫儀の中核を担っている。

浅倉由佳里

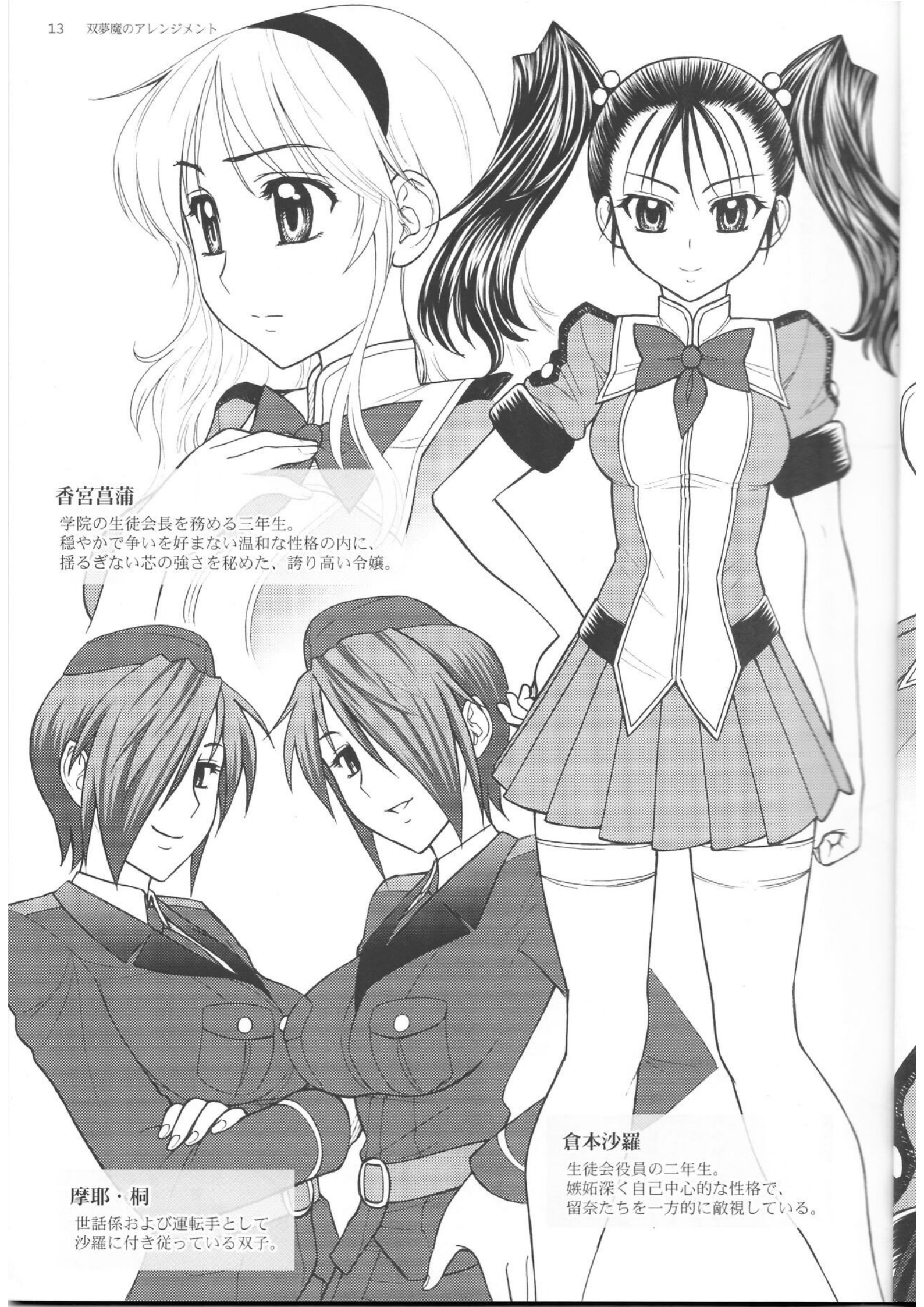
二年生。給餌妹のひとり。
直情的で勝気な少女。
沙羅とは犬猿の仲。

高野月子

一年生。給餌妹のひとり。
清楚で礼儀正しく、料理の腕は一級品と、
まさに貞淑さを絵に描いたような少女。

雛咲留奈

聖アルルナ女学院の三年生。
容姿も言動も年齢にそぐわぬ幼さだが、
れっきとしたクラブのリーダーである。



香宮菖蒲

学院の生徒会長を務める三年生。
穏やかで争いを好まない温和な性格の内に、
揺るぎない芯の強さを秘めた、誇り高い令嬢。

倉本沙羅

生徒会役員の二年生。
嫉妬深く自己中心的な性格で、
留奈たちを一方的に敵視している。

摩耶・桐

世話係および運転手として
沙羅に付き従っている双子。



清々しい朝の光の下、連れ立って登校する百合十字クラブの面々。まるでその周囲だけ宝石を散りばめたかのように麗しく華やかな光景だが、よく見れば由佳里と月子の下腹は妊娠3ヶ月ほどの大きさに張り出しているし、五月にいたっては、煽情的に仕立て直された制服の上下の隙間から、巨大すぎるボテ腹を完全に露出させている。しかし、周囲から降り注ぐのは好意と羨望に満ちたまなざしばかりで、異常を認識している生徒は誰ひとりとして存在しない。

楓が学院内に水も漏らさず張り巡らせた術式の効果である。「妊婦のように膨張した下腹部」が、「艶やかな髪、すべらかな白い肌、豊かな胸、すらりとした手足」などと同じく、あこがれの対象となるよう認識操作が行われているのだ。時代や国によって美人の定義が様々に変化してきたことを考えれば、実はごく簡単な幻術のひとつである。まったくの無から幻覚を創造して違和感を抱かせないほうが、魔術としては数段難易度が高い。

餌養母が産出する霊薬の効能で少女たちの肌や髪はその色つやを増し、身にまとった甘やかな媚香は、すれ違う生徒の頬をたちまち嬌羞に染めるほどの芳しさ。学院内での好感度は日々高まるばかりだが、一方でそんな状況がおもしろくないひねくれ者が存在するのもまた、世の常であろうか。

校舎3階の生徒会室の窓から五月らの様子を一瞥して、沙羅が忌々しげに舌打ちした。生徒会長の菖蒲（あやめ）が、朝の書類整理の手を止めてそれをたしなめる。

「いけないわ、沙羅ったら。お行儀の悪い」

「だ、だって――菖蒲お姉様は、何とも思わないの？だいたい、五月お姉様も薄情すぎますわ！元々は私たちのグループだったのに、あっさり寝返って…」

「そう言う物言いは慎みなさい。束縛と友情を履き違えるのは、子供じみた独占欲よ」

「でも、あんなにコロッと宗旨変えされたら、こっちの面目が丸つぶれじゃありませんか！もう学院中の噂なんですよ。生徒会長グループは、留奈グループに出し抜かれた、権威が逆転するのもそう遠くない、早いとこ留奈たちに取り入っておいたほうが得だ、って――」

「あらあら。私の知らない間に、どうやらこの学院は群雄割拠の戦国時代に突入したようね、天才軍師さん」

「ふざけないで下さい、お姉様！私は、ちゃんと菖蒲お姉様の、生徒会長としてのお立場を心配して…」

「いいかげんになさい、沙羅」

沙羅が、はっと息を呑んだ。穏やかで和やかな普段の菖蒲からは想像もつかない、威厳に満ちた口調だ。

「得とか損とか、立場が上とか下とか、私がそんな下らない理由で、五月と友達でいるのだと思って？私は何よりも、五月自身の気持ちや行動を尊重したいの。それに、留奈だってとても素敵な女の子よ。五月が魅力を感じて親しくなるのに、何の不思議もないわ」

「…で、でも――」

「もう、このお話はここまで。ほら、早くレジュメをまとめないと、職員会議に間に合わなくてよ？」

菖蒲の声はすでに、いつもの柔和な響きに戻っていた。



「ご、ごめんなさいお姉様。今すぐ、やりますから…」
あわてて資料のコピーを束ねる沙羅。とりあえず上辺だけは殊勝な面持ちで取り繕ったものの、瞳の奥に渦巻く嫉妬と憎悪の炎は隠しようもない。
（――菖蒲お姉様は、呑気すぎるんだ。あいつらばっかり、勝ち馬に乗って調子付いて…このままじゃこっちは落ちぶれてく一方だってのに。絶対に許せない…たかが弱小同好会の連中が、生徒会長一派よりも人気者になるなんて。私が、なんとかしなくちゃ――）
少し悲しそうに見つめる菖蒲が洩らしたかすかなため息さえ、もはや沙羅の耳には届いていなかった。
（――そう、そうよ。ギブ&テイク…。ひとり奪われたのなら、ひとり取り返せばいいんだわ…！）

留奈と五月が共に轡を置く3・Aのその日最後の授業は、水泳だった。どっしりと重い妊婦腹を抱えた五月だが、しなやかなその泳ぎに乱れはない。むしろ浮力の支えがある分、動きやすいのだろう。水生哺乳類さながら力強く波間に踊る五月に比べ、留奈のほうは相変わらず、ちゃぷちゃぷと子供の水遊びと大差ない。
やがて放課後を告げるチャイムが鳴った。かしましくおしゃべりしながら、室内プールから上がる少女たち。濡れた水着にぴっちりと包まれたうら若い肢体が、足取りも軽く更衣室へと消えてゆく。
そんな中、留奈と五月は思わせぶりに目で合図を交わすと、連れ立ってシャワールームのいちばん奥へと向かい、ふたつの身体を個室にすべり込ませた。待ちに待ったふたりだけの時間。水着を脱ぐ間も惜しんで抱きしめ合い、腰をまさぐり、貪るように口唇を重ねる。
「ん…ぅ♡　ねぇ…はやく食べさせて、留奈のウンチ♡」
「もう…五月ったら、食いしん坊なんだから…ぁふ」
「だって、たくさん泳いだら、お腹空いちゃったんだもの♡　それにここなら、身体中ウンチまみれになって遊んでも、ちゃんと洗い流せるし…♪」
カーテンで仕切られただけの無防備な区画だが、着替え中の他の生徒は、ふたりの姿や声どころか、そこに個室があることさえ認識できない。あらかじめ、結界が張られているのだ。こうしたプレイルームはトイレや理科準備室、体育館倉庫など、学院のそこかしこに設置されており、昼休みや放課後には、夜を待ちきれなくなったクラブのメンバーたちの戯れの場となっていた。
「留奈も、ボクのお口にウンチしたいんでしょ？　ほら…お尻の穴が、もうこんなにプックリしてるよ――」
五月の舌が、水着の股布ごしに肛肉をねっとりとねぶり上げる。たちまち留奈の排泄欲求が昂ぶり、隆起した淫肛の花弁がくっきりと浮かび上がった。
「く…ぅ、さ、五月、出る、ウンチ…でちゃうぅっ！」
布地の内側にモリモリとひり出されてゆく糞餡。こんもりと山を成した水着の尻に頬擦りすると、五月は大きく口を開け、その膨らみにむしゃぶりついた。





「いただきまぁす♪——っあむ、んぐ、はむ…んぷぅ♡あぁ…やっぱり美味しいなぁ、留奈のウンチって…♡」
「く…っんぅ、もっと、もっと食べて、五月…♡」
高度に精錬された餌養母の霊性を維持するために、おやつ代わりの養糞補給は必要不可欠だ。甘臭い姫糞を口いっぱいに頬張り、両手ですくって顔を埋ずめ、全身へ塗りたくる五月。白と紺の水着が、たちまち糞茶色に染め上げられてゆく。
うっとりと瞳を揺らめかせ、五月が留奈を抱き寄せた。白い肌に絡みつく糞まみれの肢体。立ち込める淫糞の香りと甘い口づけに、留奈の剛直もまた激しく発情する。

「うふふ♪水着の前のとこ、こんなにテント張っちゃってるよ。苦しそうだね、留奈…♡」
「さ、五月、じらさない…でぇ、く…っはぁンっ♡」
「軽く2・3発、抜いとこっか。このままじゃ制服にも着替えられないし——それにボクもいま、留奈のチンポミルク、すっごく飲みたいんだ…♡」
「っく…はんぁあぁっ、五月、ん…ぁあっ、いいの、それ、気持ち…いい、もっと、っく…ひンぅううッッ!!」
フェラチオで、パイズリで、あるいは全身をソープ嬢のごとく擦りつけて、留奈の淫茎に水着ごしの奉仕を尽くす五月。とめどなく吐き出される濃厚な粘液が、水着にお漏らし同様の沁みを描く。やがて布地からにじみ出てきた白蜜を、五月の口唇が丹念に舐め啜った。
「はぁ、はぁ…、もう…ダメ、五月、わ、私も——」
糞果と淫汁をたて続けに搾り取られ、幼子のようにすがりつく留奈。その瞳が哀願するものは、明白だった。



「あぁ…ごめんね、留奈。ボクも、いますぐ留奈にウンチをお腹いっぱい、食べさせてあげたいんだけど――楓ちゃんからも、きつく言われてるんだ。留奈にお願いされると、ボク、つい…甘やかしちゃうから」

深夜の密儀に向けて淫欲を高揚させることが少女たちの務めとはいえ、基本的にはそれ以外の交合も自由である。しかし、餌養母の排泄行為となれば話は別だ。

「ううん…いいの。私も、楓に注意されたんだ。五月を困らせちゃいけない…って。ちゃんと、夜までガマンしなくちゃね…」

しゅんとうつむきながらも、健気に微笑む留奈。母性溢れる五月にとって、それはガード不能の一撃だった。

「あぁ…もう、そんな顔されたら――そうだ！　ねぇ留奈、要するに、ウンチをひり出さなければいいんだよ！」

「え…？　どういうこと、五月…」

いぶかしむ留奈の前で、水着をめくり上げた五月が壁に向かって手を付き、犬のように片足を上げた。

「ボクのお尻の穴に、留奈が舌を突っ込んで、それから肛門ギリギリのとこまで息めば…♡　ね、これなら、規則は破ってないでしょ…？」

「まぁ…！　五月ったら、なんて頭がいいの!?」

ぱあっと瞳を輝かせ、さっそく肛門へと舌を挿入する留奈。舌先でぐいぐいと腸肉をマッサージし、五月の蠕動を促進させる。溢れる豊潤な腸汁。やがて、ゆっくりと押し出されてきた糞餡が、ついに舌の先端に触れた。

「ん…おぷ、ぇあ、は…ぁおぉ…っ♡」

「くぅ…んふ、はぅ…っ♡ど、どうかな、ちゃんと…留奈の舌に、ボクのウンチ…届いてる？」

こくり、と小さくうなずいて、一心不乱に舌を蠢かせる留奈。深々と捻じ込まれた舌肉が、泡立て器のように腸腔を掻き混ぜ、糞餡の表面を舐めとってゆく。

「る、留奈、そんなに…激しくしちゃ、ウンチが、どんどん…減っちゃうよ、はぅ…んぉほぉおンンッッ♡」

加減を知らない留奈の舌戯に、幾度となく肛唇アクメに達しながらも、五月の括約筋が全開まで緩むことは決して無い。結局、一時間にも及んだ聖糞試食の間、五月は見事に排泄をコントロールし続けたのだった。



ちょうどその頃。表向き「中世民俗学研究会」となっている百合十字クラブのミーティングルームへ向かっていた月子を、校舎裏で沙羅が呼び止めていた。
「あの――月子さん。ちょっと…お時間よろしくて？」
「え？あ…はい、あの、どういったご用件でしょうか」
思いもよらなかった相手から話しかけられ、一瞬、不信をあらわにする月子。しかしすぐに生来の淑やかさを取り戻し、礼儀正しく受け答えする。
「えぇと、その――私、謝罪しなくては、と思って…」
「しゃ、謝罪…ですか？」
さすがの月子も、素っ頓狂に声を裏返した。
「そう。この前のこと…あなたたち同好会に対して、とても失礼な物言いをしてしまったわ。…私、五月お姉様を奪われたように感じて、それが悔しくて、ついあんな言い方を――ごめんなさい、反省してます」
沙羅の負けん気の強さと言えば、学院でも知らぬものがいないほど有名だ。それがまさか神妙な面持ちで謝罪を口にしようとは、完全に月子の想定外だった。
「ダメね、私ったら…。菖蒲お姉様にも叱られたわ。いつまでも子供っぽさが抜けない、って」
「そ、それは…どうも。あの…そうお思いなら、私でなく、留奈お姉様たちに直接、おっしゃったほうが…」
「分かってるわ。でも…情けない話、その勇気が、どうしても出なくて――。迷惑を承知の上で、声をかけたの。あなたに、仲を…その、取り持ってほしくて」
物怖じする沙羅の気持ちも分からなくはない。誰もが心当たりのある感情だろう。何にせよ、諍いの芽が摘まれるのは良いことだと、月子は思った。
「そうだったんですか…。分かりました。私でよければぜひ、お力添えさせて下さい」
「ありがとう、月子さん！実は、あなたに声をかけたのには、もうひとつ理由があるの。私…何か心のこもった贈り物を持って謝罪に伺うつもりで、お菓子を手作りしてみたんだけど――」
「まぁ、素敵じゃありませんか」
「恥を忍んで言うわね。まるで、マンガみたいな失敗作ばっかりなのよ。あなたのお手製ムースに『こんなのいつでも作れる』なんて偉そうなこと言った自分の無知さを思い知らされたわ。それが悔しくて情けなくて…」
月子の手を握りしめ、思い詰めた瞳で訴えかける。
「でも、それこそつまらない意地だって、ようやく気づいたの。お願いします、月子さん…ううん、月子先生、どうか私に、お菓子作りの手ほどきをして下さい！」
あらためて深々と頭を下げる沙羅。根が純真な月子がたやすく丸め込まれてしまったのも無理はない。いつも生意気で我の強い性格を印象付けているほど、素直な態度は最大級の落差で効果を発揮する。天性の性悪女である沙羅は、その手口を本能的に心得ていた。
「お顔を上げて下さいませ、沙羅様。もちろん、喜んでお手伝いいたしますわ。一緒に美味しいお菓子を作って、留奈お姉様たちを驚かせてさし上げましょう！」
「ほ、本当に…!?よかったぁ、じゃあ、さっそく材料の買出しに行きましょうよ！南口の百貨店はどう？」
「――い、今から…ですか？た、確かにあそこなら、製菓コーナーも充実してます、けど…」
「大丈夫、時間は取らせないわ。うちの運転手を呼んでおいたの。車なら行って帰ってきても、すぐでしょう？善は急げよ♪お買い物が済んだら、寮のキッチンを借りて――うふふ、なんだかワクワクしてきちゃった♡」
自分勝手は相変わらずのようである。月子は苦笑しつつも、沙羅の子供っぽいはしゃぎように、いつしか微笑ましささえ感じはじめていた。
学院の裏門に、黒塗りの大型車が横付けされた。大企業の社長令嬢や旧家の娘など裕福な生徒は数多いが、その中でもトップクラスの高級外車である。

助手席からしなやかな所作で降り立ったのは、前髪で顔の右半分を隠した、すらりとした長身の麗人。見れば、運転手（こちらは顔の左半分が隠れている）と瓜ふたつの容貌である。双子であることは間違いない。優雅な物腰で音も立てずにドアを開け、沙羅と月子を後部座席へとエスコートする。

「摩耶と、桐よ。私の世話係&運転手、そしてお目付け役ってところね。ご挨拶なさい、摩耶、桐。こちらは私のお友達の、月子さんよ」

「「はじめまして、月子様。本日は沙羅お嬢様のお買い物にご同行いただき、心から感謝申し上げます。どうぞ車内では、ごゆっくりおくつろぎ下さいませ」」

双子の言葉が、気味の悪いほど完璧なユニゾンを奏でた。思わず目を丸くした月子が、あわてて頭を下げる。

「い、いえ…そんな、こちらこそ、お世話になります」

その瞬間、双子の切れ長の瞳が、市場に並んだ家畜を値踏みするように妖しく揺らめいた。

沙羅は、車を百貨店の正面入口前に堂々と路上駐車させた。大型高級車にのみ許された暗黙の特権だ。一般買物客らの羨望と嫉妬の眼差しが注視する中、ふてぶてしいまでにツンとすました沙羅と、申しわけなさそうに身を縮こませた月子が降車する。桐は車内で待機し、摩耶がカートを引いて買物に付き従った。

ふたり仲良く作ったお菓子が橋渡しとなって、わだかまりが解けたらどんなに素敵だろう。月子はそんな夢想を描きつつ、うきうきと材料をカゴに入れてゆく。

「このお店、めずらしい材料までひと通り揃っているので、私もよくお買物するんです。そうだなぁ…最初はプリンとか、パウンドケーキとか――フロマージュ・ブランなんかも、意外と簡単なんですよ」

「ふぅん…、そうなんだ」

たいして興味無さげにカラ返事する沙羅の表情も、目に入ってはいない。通い慣れた店で買物しているという安心感が、月子をすっかり油断させていた。

帰途に就いたはずの車中で、月子がようやく異常に気づいた。進路がおかしい。学院とは逆方向だ。

「あ、あの――すぐに、学院に戻るという話では…」

「まぁ、いいじゃない。私の家、この近くなのよ。一晩くらい泊まってくといいわ。だいたい、私にふさわしくないのよね。寮の粗末なキッチンなんて」

「そ…そんな、困ります！私にだって、今晩の予定があるのに。止めて、すぐに車を止めて下さい！」

めずらしく声を荒げた月子の叱責もどこ吹く風と、冷ややかな嘲笑を浮かべる沙羅。もはや、上っ面だけの改心であったことを隠す気さえないのだ。月子は心底うんざりして、ため息をつき携帯を取り出した。だが。

「け、圏外…？どうして――」

突如、後部座席に向けてガスが噴き出した。はっと顔を上げる月子。沙羅も双子も、いつどこから取り出したのか、すでにガスマスクを装着している。
「――そ、そ…んな――」
驚愕に見開かれた月子の瞳が、ゆっくりと閉ざされてゆく。やがて力なく崩れ落ちた獲物の肢体を見くだす沙羅の冷笑は、捕虜収容所の看守よりも残酷だった。



ふたりきりの甘い時間を満喫した留奈と五月が、着替えを終えクラブのミーティングルームを訪れたのは、そろそろ日暮れ時を過ぎようかという時刻である。
「ご…ごめん、遅くなっちゃって。あの、ええと…」
扉を開けた二人はすぐ、先に来ていた楓と由佳里のただならぬ雰囲気に気づいた。楓は下顎に指を添えて眉をひそめ――それは聡明な彼女が滅多に見せることのない明らかな困惑の表情であった――床の一点を凝視し、由佳里はそわそわと窓際を行ったり来たりしている。
「もしかして…もう楓にバレちゃったの？五月のウンチを、私がつまみ食いしたこと――」
「ち、違うんだよ楓ちゃんっ！留奈は悪くないの、味見くらいなら大丈夫だよって、ボクが無理やり――」
「留奈お姉様、五月様、今はそれどころではありません。月子が、消息を絶ちました」
「え…？」「月子ちゃんが…？」
思いもよらなかった言葉に、並んで絶句する二人。
「消息って――楓ちゃん、いったいどういう…」
「携帯が圏外なのです。あり得ない、ことなのですが…」
五月が、ガクッと拍子抜けした。
「な――なに言ってるの、楓ちゃん…。地下とか、電波の届かないところはいくらでもあるよ。ケータイ持ってないボクだって、それくらい知ってる――」
「五月、私たちの持ってる端末は、特別なの」いつになく真剣な留奈の眼差しが、五月の口をつぐませた。
「何ていうか、その――」
「特殊なＧＰＳが内蔵されている、と言ったら分かりやすいでしょうか。地下だろうと山奥だろうと、どんな遮蔽物も電波障害も関係なく、持ち主の生体波動をテレパシーのように伝えて、位置を知らせてくれるんです」
楓があとを続けて補足する。荒唐無稽なオカルト理論であるが、留奈たちが持つ不思議な力は、誰よりも五月自身が身をもって体験している。疑う理由はなかった。
「生体――って、まさか…そ、そんな！だったらこんなとこで、じっとしてちゃダメじゃないか！」
事の重大さを悟った五月の表情が、硬くこわばった。
「五月様の言うとおりだよ、楓っ！私は行くからね、どうせ犯人の目星は、付いてるんだから！」
「待ちなさい、由佳里」
「どうしてっ！」
「その被疑者もいまのところ、消息不明よ。学院内にいないことだけは間違いないわ。それに…問い詰めたところで、素直に認めるような相手じゃないでしょ」
「そ、それは…そうだけど――」
「無闇に突っかかってくと、返り討ちに遭うわよ。裏門を出た直後に、月子の反応はプッツリと途切れてる。素人に出来ることじゃないわ。ただの小娘が、いつ、どうやってその力を手に入れたのか、それとも――」
「か、楓ちゃん――小娘って、まさか…」
思い当たるふしがありすぎる少女の顔が、五月の頭に浮かんだ。
「何か…ボクに手伝えることないかな。もし、あの娘のことを言ってるなら、ボクも、よく知ってるし――」
「ご心配には及びません、五月様。月子についても、どうかご安心下さい。誰のどんな力をもってしても、給餌妹に本質的な危害を加えることなど不可能です。月子も含めて、我々の生命はすでに、餌養母の大いなる霊性によって幾重にも庇護されているのですから」
「餌養母――、ぼ、ボクの…？」
「はい。むしろ重要なのは、我ら百合十字クラブに拮抗しうる力を持った異分子の、正体と目的を知ることです。月子の件はいわば、餌養母の守護に仇なす不届きな害虫からの、宣戦布告なのですよ――」





そこは、解剖室を思わせる冷たい地下室だった。清潔すぎる白い壁と、雑多な凌辱器具に取り囲まれたベッドの上で、すべらかな肢体が身じろぎする。裸に剥かれ革ベルトで後ろ手に縛り上げられた、月子である。

「――ん…ぅ、ぁ…ふ、こ、ここ…は――」

「やれやれ、ようやくお目覚めのようね。じゃあ、さっそく始めましょうか。摩耶、桐、たしか今日のお料理は、メス豚の活け作りだったかしら？」

「「はい、沙羅お嬢様」」

不快な声の方向を見定めようと、ズキズキと重く軋む頭をどうにか持ち上げる月子。その視線が、腕組みしてこちらを見下ろす傲岸不遜な沙羅の瞳とぶつかった。

「さ、沙羅…さん、なんて…ことを――」

「フフ。約束のお菓子作りじゃなくて、ごめんあそばせ。でもまぁ、これはこれで楽しいわよ、きっと」

平然とうそぶく沙羅。その手に高画質デジカムがぶら下がっているのを見た月子の顔から、血の気が引いた。

「さぁ――始めなさい、摩耶、桐」

おもむろにカメラを構えた沙羅が、淡々と命じる。双子はうやうやしくうなずくと、月子の裸身をひっくり返し、股を強引に割り拡げた。あられもなくさらけ出された乙女の秘部が、レンズの真正面に映る格好だ。

「……く……っ！」

口唇を噛み締め、気丈にも沙羅を睨みつける。愛悦に満ちた淫宴を知っているからこそ、一方的な凌辱行為に対して、月子は激しい嫌悪感を抱かずにはいられない。

「あら。見かけによらず、ずいぶん芯が強いメス豚だこと――あぁ、そっか。慣れっこってことね。どうせ例のオカルト研じゃ、暇さえあればこういう変態プレイしてるんでしょ？」

月子の瞳が一瞬たじろぐ。だが、もちろん沙羅が真実を知っているはずもなく、それは単にクラブを侮蔑したいがための、いつもの悪口に過ぎなかった。

「だったら、こっちも手加減する必要はないわね。摩耶、いちばん太いので、目一杯ブチ込んでやりなさい」

「かしこまりました、お嬢様」



妖しく微笑んだ摩耶が、壁際の棚から馬鹿馬鹿しいほど規格外の大型浣腸器を手に取った。一方、桐が運んできた巨大な寸胴の中には、10リットルを優に越えるであろう毒々しい緑色の粘液が、タプタプと溢れんばかりに波打っている。

「ふぅ…っ。こっちは準備OKよ、摩耶♪」

「ご苦労様、桐。さて、下ごしらえといきましょうか」

ひと抱えもあるシリンダーに薬液を充填すると、摩耶はそのあまりに暴力的すぎる凶器を、お医者さんごっこよりも気軽に月子の尻穴に突き立てた。

「あ…う、うぐ…っふ、はぅ…んぐぅううッッ！」

ぞっとする勢いで増してゆく下腹の圧迫感。月子が恐怖のあまりうめき声を漏らし、顔面蒼白になって悶絶しても、摩耶は手を緩めるどころか、薄笑いさえ浮かべて浣腸し続ける。1本目を終え、すかさず2本目を補充するその手際には、一切の躊躇も気遣いもない。

「あらあら、なんてみっともないお腹かしら。メス豚っていうか、これじゃまるでカエルの解剖ね」

残忍な嗜虐欲に爛々ときらめく沙羅の瞳が見つめる中、摩耶は休みなく注腸を繰り返し、ついに寸胴を満たしていた粘液をすべて月子の胎内へと移し替えてしまった。



「はぁっ、はぁっ、ぁぐ、っひ、いぎぃいいいッッ!!」
内臓が捻じ切れんばかりの壮絶な蠕動が、月子の腸管を軋ませていた。拡張訓練を施され、大量浣腸にも慣れているはずの給餌妹の肉体から、どっと汗が噴き出る。
（た、ただの…お浣腸液じゃ、ない…っ！だ、ダメ、ウンチ、五月様のための…ウンチを、こんな連中の…前で、お漏らしする、わけには、あぁ…でも……っ！）
懸命の抵抗も空しく、決壊の時が訪れた。愛らしい肛蕾が腸液を滴らせながら花開き、これでもかと隆起した括約筋の輪が、糞肉をミチミチと送り出しはじめる。
「っ…くぅ、ひぁ、はぅ…ぐ、っふ…んぅんんッッ!!」
どっしりと重厚な極太糞をとめどなくひり出し続ける月子の姿を、カメラは余すところなく撮影していた。

「まったく、はしたないメス豚だこと。よくまぁそれだけ溜め込んでたものね。臭いったらありゃしないわ」
わざとらしく鼻をつまみ、沙羅が眉をしかめた。
「とりあえずこの映像があれば、抵抗する気も起こらないでしょ。じゃ、あとは頼んだわね、摩耶、桐。これ以上その汚らしいメス豚と同じ部屋にいたら、私にまで悪臭が沁みついちゃうわ」

そう言ってせせら笑うと、沙羅はカメラを携え後ろ手にドアを閉めて立ち去った。深々とお辞儀してそれを見送る摩耶と桐。しかし再び頭を上げたとき、双子の態度は仮面を脱ぎ捨てたかのように豹変していた。
「――やれやれ。育ちの悪いガキに気をつかうのも、楽じゃないわ。卑しい俗臭を撒き散らしてるのが自分のほうだとも知らず、所詮は成金の小娘か…」
「ほんと、笑っちゃうわよね、摩耶♪給餌妹のウンチの豊潤な芳しさも理解できないくせに、あれでいっぱしのグルメ気取りなんだから♪」



その言葉が、半ば気絶していた月子の意識をはっきりと覚醒させた。驚愕に見開いた瞳を双子へと向ける。
「――あ…、あなた…たちは、い…ったい…、」
双子は思わせぶりな微笑を浮かべると、月子がひり出した糞肉をおもむろに指ですくい取った。何の躊躇もなく口へと運び、舌で入念にテイスティングする。
「ぁむ…んふぅ…♡ 美味しい――そこいらの下衆どものウンチとは、まるで比べものにならない味わいだわ。濃厚で、奥深くて――」「これが、餌養母に捧げるための、聖なる供物なのね…♡ 味も香りも、肉質も、何もかも申し分ない、まさに極上の仕上がりだわ…♡」
摩耶と桐がただのお目付け役でないことは、もはや明白だった。月子の瞳に戦慄が走る。双子の目的が給餌妹だけであるはずはない。餌養母に、黄金の百合十字クラブそのものに、危険が迫りつつあることを悟ったのだ。



「ふふ…おびえた顔も可愛らしいわよ、月子ちゃん」
「でも安心なさい。つまらない儀式なんかより、もっともっと気持ちいい夢を、私たちが見させてあげる♪」
「クラブのことなんて、すぐにどうでもよくなっちゃうんだから♡」
月子の顔から再び血の気が引いた。いそいそと服をはだけた双子の下腹にそそり立つ異形。それは月子もよく知る、力を持つものたちの証しに他ならなかった。
「だ、ダメ、やめて…ください、はぐ…ぅんうぅッ！」
緩みきった月子の肛穴を、桐の肉槍が深々と貫いた。
「くふ…んうっ♪ いい感じよ、月子ちゃん。さっきの浣腸液は特別製でね。粘り気が強いから、腸壁に絡みついてなかなか流れ落ちないでしょ。つまり、どんなに排泄しても、ずっと浣腸効果が持続するのよ♪」

「ひぎいっ、う、動かしちゃ…だめぇっ、お尻が、お尻が灼けるぅうっ！っく、うぁ…っあぅンンッ!!」
「だから…こうやって挿入すると、ウンチと勘違いした直腸が、反射的にグリュグリュ蠕動してひり出そうとするってわけ。その腸壁に逆らって無理やりチンポを捻じ込むのが、最高に気持ちいいのよね♪」
括約筋を締めつけて拒絶の意思を示すことすら出来ず、休みなく息み続ける月子。排泄本能に収縮する肛輪から、抽挿のたび腸液の飛沫がとめどなく噴き上がる。いまや月子の秘肛は、桐の為すがままに蹂躙されていた。
「うふふ…ほら、まだ満腹するには早いわよ、月子♡」
肛肉を串刺しにしたまま、桐が月子の身体を担ぎ上げる。大股開きにされた秘肉の中心に前方から狙いを定め、今度は摩耶が、根元まで一気に淫茎を突き挿した。
「――ひ…っいぎぃいいぃッ!?」
「ん…っくふぅう…っ♡さぁ…私たちのチンポを、おまんことお尻の穴で、お腹いっぱい味わいなさい…♡」
「いやっ、嫌ぁっ、許して、ぅあ…ぁんぁはあぁっ♡」
月子の口唇から、思わず濡れた吐息がこぼれた。ふたつの淫穴はすでに芯まで蕩け、グチュグチュとえげつない水音のハーモニーを奏でている。排泄行為と淫悦を条件反射的に結び付けられている給餌妹の肉体は、強制双穴凌辱によって難なく陥落した。
「じゃあ…さっそく、一発目イクわよ、月子…っ♪」
「一滴残らず、受けとめなさい…っく、んふぅうッ♡」
「だ、ダメ、中は、あ…っんぁはあぁあンンッッ！！」
同時に達した双子の淫根から、膣奥と腸奥へ精汁が容赦なく注入される。その直後、異様な感覚が月子を襲った。熱く脈動する濃厚な粘液が、たちまち肉壁に沁みこみ、じわじわと身体中を侵食してゆくのだ。
「ひ…っ、な、何…これ、っく、ぅあ…ぁあぁぁっ！」
挟みこんだ月子の左右の耳に、双子が前後から囁く。
「うふふ…私たちの精液を種付けされたが最後、お前はもう二度と、現実世界には戻れないのよ…♪」
「さぁ…安らかにお眠りなさい、月子。深く、もっと深く…♡永遠の淫夢が、お前を待っているわ――」



「この泥棒猫っ！あんたの仕業だってことは、とっくにお見通しなんだからねっっ！」

翌朝。生徒会室へと向かう沙羅の前に、由佳里が立ちはだかった。留奈・五月・楓も勢ぞろいしている。

前日とはうって変わって、五月と由佳里の下腹の膨らみはほとんど目立たない。月子を欠いた状況の儀式では、聖糞を完全に循環させることが出来なかったのだ。

「何なのよ、朝っぱらから騒々しいわね、野蛮人」

「な、なんですってぇーっ!? キィーッ！」

すかさず、楓が割って入った。

「裏門付近で目撃した生徒たち。それと百貨店の受付嬢の証言からも、あなたが昨日の放課後、月子と買物していたことは、はっきりしてるのよ」

「ふ〜ん。それで？」

「…そこから、月子の足取りが摑めないの。沙羅、あなたなら、何か知っているんじゃないか、と思って」

とうとう堪えきれなくなった沙羅が、真剣な面持ちの楓をあざ笑うかのように盛大に吹き出した。

「ぷっはははは！ なぁんだ、そんなことだったの。月子さんなら、ずっと私の家に泊まってますけど、何か？」

「そんなバカなこと、あ・る・か…ムググ」

「だ、ダメだってば、落ち着いて由佳里ちゃんっ」

「しーっ、ここは楓にまかせるのよ、由佳里…」

鼻息も荒く飛びかからんばかりの由佳里を、五月が後ろから羽交い絞めにし、留奈が口を塞いでなだめる。

「そうだったの…安心したわ。外出の連絡もないし、携帯も繋がらないから、何かあったのかと思って」

「ちょっと楓、心配する気持ちも分かるけど、月子さんにだってプライベートな交友ってものがあるでしょ。それを証言だの足取りだの…名探偵じゃあるまいし、少し干渉しすぎじゃない？」

「――そう…ね。じゃ、探偵気取りついでに聞くわ。月子はどうしてるの？ まだ登校してないみたいだけど」

「ふふ…実はね、昨日ふたりで楽しくお菓子作りをしたんだけど、あんまりはしゃぎすぎたせいか、月子さんったらかわいそうに、お熱を出してしまったの。だから今日は大事をとってお休みさせたわ。学院のほうには、職員会議のときに私が直接、伝えておくから」

沙羅の言っていることに、とりあえず矛盾はない。これ以上問い詰めたところで無駄骨であろう。

「まぁ、それはお世話様。恩に着るわ、沙羅」

「どういたしまして、お安い御用よ。さてと…もういいでしょ。生徒会の朝も、けっこう忙しいのよ」

憮然とした面々を残し、沙羅が生徒会室の扉に手を掛けた。ふと、何かを思い出したように立ち止まる。

「そういえば――もしかして、わざと…じゃないかしら。月子さんの携帯が、繋がらなかったのって」

「なんですって」

さすがの楓も、語気を強めた。

「私、月子さんに言ったのよ。うちは客間が余ってるし、遠慮しないでいくらでも泊まってって構わないって。そしたら彼女――なんて返事したと思う？」

小悪魔の邪悪な嘲笑が、ゆっくりと振り返る。

「じゃあ、いっそのこと…寮を引き払って、こちらに下宿させていただいちゃおうかな――そう呟いたのよ。あの娘、仲良しグループの束縛に、そろそろ嫌気が差したんじゃないの？ だから携帯の電源を切って、自分からは連絡もしない。どう？ この名推理――ウフフ」

「ふざっけんじゃねーぞ、このヤローッ！」

拳を振り上げた由佳里を尻目に、素早く生徒会室へと滑り込む沙羅。ピシャリと閉ざされた扉の前で、由佳里が地団駄を踏んだ。

「逃げんのかよっ、沙羅！ なにが推理だ、あんただけは、ぜったい、絶対に許さないっ！」

「由佳里、もういいから」

「か、楓は悔しくないのかよっ！ あんなことまで言われて――」

激昂していた由佳里が一瞬で凍りついた。眼鏡の奥で、楓の瞳が死よりも冷たい微笑を湛えている。

「悪戯や嫌がらせのレベルじゃない。どうやら、本気で私たちに敵対するつもりのようね、あの小娘――」

固唾を飲んで見つめる留奈たちの視線に気づき、楓はたちまちその表情を消し去った。振り向いたときにはもう、いつもの平静さを完璧に取り戻している。

「さぁ、私たちも、それぞれのクラスに戻りましょう。そろそろ、朝のホームルームが始まる時間ですわ」

「沙羅――さっきのお話、本当なの？　月子さんが、妻を引き払って、あなたの家に下宿したい、だなんて…」
　生徒会室の中には、すでに菖蒲が来ていた。当然、廊下での言い争いも筒抜けだったはずだ。
「ええ、もちろんですよ。――やだなぁ、まさか菖蒲お姉様まで、私を疑うんですか？」
「い、いえ、そういうわけじゃないのよ。ただ、にわかには信じられなくて――あの月子ちゃんが、そんな…」
「ふふ…意外とウブなんですね、菖蒲お姉様って。いつも仲良さげな女の子同士が、心の中ではお互いウザいと思ってることなんて、よくある話じゃありませんか」
　恐るべき面の皮の厚さで、平然と言い放つ沙羅。あまりにも自信に満ちたその態度に言い知れぬ不安を感じつつも、菖蒲にはそれ以上問い詰めることが出来なかった。

　小テストの解答を片手間に埋めながら、楓は頬杖をついて窓の外を眺めていた。鋭く視線をきらめかせ、彼方に広がる街並に、魔術的地図を重ね合わせる。
　五月に話したとおり、そもそもオン／オフに関わらず持ち主の生体波動によって作動する端末なのだ。電源を切った切らないの推論など、笑止にも程がある。
　しかしそれをあの場で説明すれば、それこそ沙羅の思う壺だ。オカルトや電波系のレッテルを貼られ、月子が距離を置きたくなるのも無理はない、という展開が待っていたことだろう。何より、月子が人質に取られている状況では、どんなに沙羅の言動が不愉快極まりなかろうとも、ひとまず黙って受け容れるしかない。
　にもかかわらず、楓は密かにほくそ笑んでいた。抑えきれない愉悦を隠すように、口元を手で覆う。あの生意気な小娘を淫獄の闇の底へと叩き落すに足る、正統な理由が出来たのだ。もはや何の遠慮も要らない。
　また月子の生存についても、楓に不安要素は無かった。餌養母がもたらす無限の加護によって、給餌妹の本質的霊性――即ち、生命や魂の基本構造が損なわれることは決してあり得ない。つまり、生体波動の信号は消滅したのではなく、何ものかによって遮断されているのだ。

　それほどの術者であれば当然、給餌城の価値は知っていよう。黄金の卵を産むガチョウを盗み出して、むざむざ殺す馬鹿はいない。そして、一匹のガチョウだけでは意味が無いことも、もちろん知っているはずだ。
　沙羅の後ろで糸を引く略奪者の次の一手を誘導すべく、思索を巡らす楓。気づけばチャイムが鳴り、授業の終わりを告げている。楓はさっそく行動を開始した。

　昼休みのテラス。いつものようにランチに集った留奈たち一行だが、どこか気もそぞろで、会話もいまひとつ弾まない。月子の不在が、暗い陰を落しているのだ。
「――留奈、ボク、やっぱり確かめてくる。沙羅ちゃんは確かに…その、ああいう娘だけど、誘拐とか、監禁とか――そこまでするなんて、ボクには信じられないんだよ。同じ学院の生徒同士で、そんな…」
　決意に輝く五月の瞳は、あまりにも凛々しかった。
「う、うん。五月がそう言うなら――。ね、楓」
「そうですね…菖蒲お姉様と近しい間柄だった五月様になら、沙羅も真実を告白してくれるかもしれません」
「ボクもそう思う！　きっと、何か事情があるんだよ。できたら直接沙羅ちゃんの家に行って、月子ちゃんの様子も見てくるから。よーし、こうしちゃいられない！」
　あっという間にランチを掻っ込む五月。仕上げにドリンクを一気に飲み干し、勢いよく席を立つ。小走りに食器を返却すると、すぐに姿が見えなくなった。

「ちょ、ちょっと楓、いいの？　一人っきりで五月様を行かせるなんて。わざわざあの泥棒猫にエサのお代わりを差し出すようなもんじゃ…」
「大丈夫よ、由佳里。この件は、もう留奈お姉様にも了解していただいてるから」
「ほ、ホントに？　いいんですか、留奈お姉様――」
　釈然としない表情で目を向けた由佳里に、留奈がコクン、と小さくうなずいた。
「五月の性格からすれば、いずれこうなることは分かってたし――止めたりしたら、かえって嫌われちゃうもの。でも、本当に…任せていいのよね、楓…？」
「もちろんです、お姉様。五月様を見失うことは、決してありません。お約束いたしますわ」





とりあえず生徒会室へと足を向けた五月だが、その必要はなかった。途中の渡り廊下で、反対側から歩いてくる沙羅とばったり出くわしたのだ。五月は自分の運の良さに感謝しつつ、さっそく駆け寄って声をかけた。

「沙羅ちゃん、あの…ちょっと、いいかな――」

謎めいた微笑みを返す沙羅。不意に、五月の首筋に顔を近寄せ、こっそりと耳打ちする。

「実は…私のほうからも、五月様にお話ししたいことがありますの。そう――もちろん、月子さんのことで…」

五月の瞳に緊張が走った。沙羅が続ける。

「でも…お分かりになりますよね、こんな人目の多い場所じゃ、とてもできないお話なんです。だから…放課後、ふたりっきりで会っていただけませんか？」

握り締めた五月の手に、思わず力がこもった。

「――わかった。約束するよ。必ず、ひとりで行く」

「ありがとうございます♪では、学院の裏門のところで、お待ちしておりますので。そうそう、このことはくれぐれも――特にクラブのみなさんには、ご内密に…♪」

生徒会室でひとり物思いにふけっていた菖蒲が、ふとカーテンが揺れる気配を感じ、顔を上げた。

「さ、沙羅…！いったい、いつ…この部屋に――」

沙羅が、目の前に音もなく佇んでいる。学院の別の場所で、まったくの同時刻、五月もまた沙羅と会話していることなど、もちろん菖蒲には知る由も無い。

「菖蒲お姉様…、実は、私――お姉様に、ご相談したいことがあるんです。月子さんの、ことで…」

めずらしいことに、ずいぶんと殊勝な面持ちである。

「な――なんですって…、」

「お願いです、菖蒲お姉様。どうか何も聞かず、一緒に私の家に来て下さいませんか…？私、もう…どうしていいのか、分からなくて――」

もったいぶった物言いに、思わず固唾を呑む菖蒲。しかし、生来の誇り高い責任感が彼女を突き動かした。指標となるべき姉役として、沙羅の暴走を諫めきれなかった自らの不明を、菖蒲は悔やんでいたのだ。

「…分かりました。私も、一度あなたの家に行かなくては、と思っていたの。今日の放課後でいいかしら？」

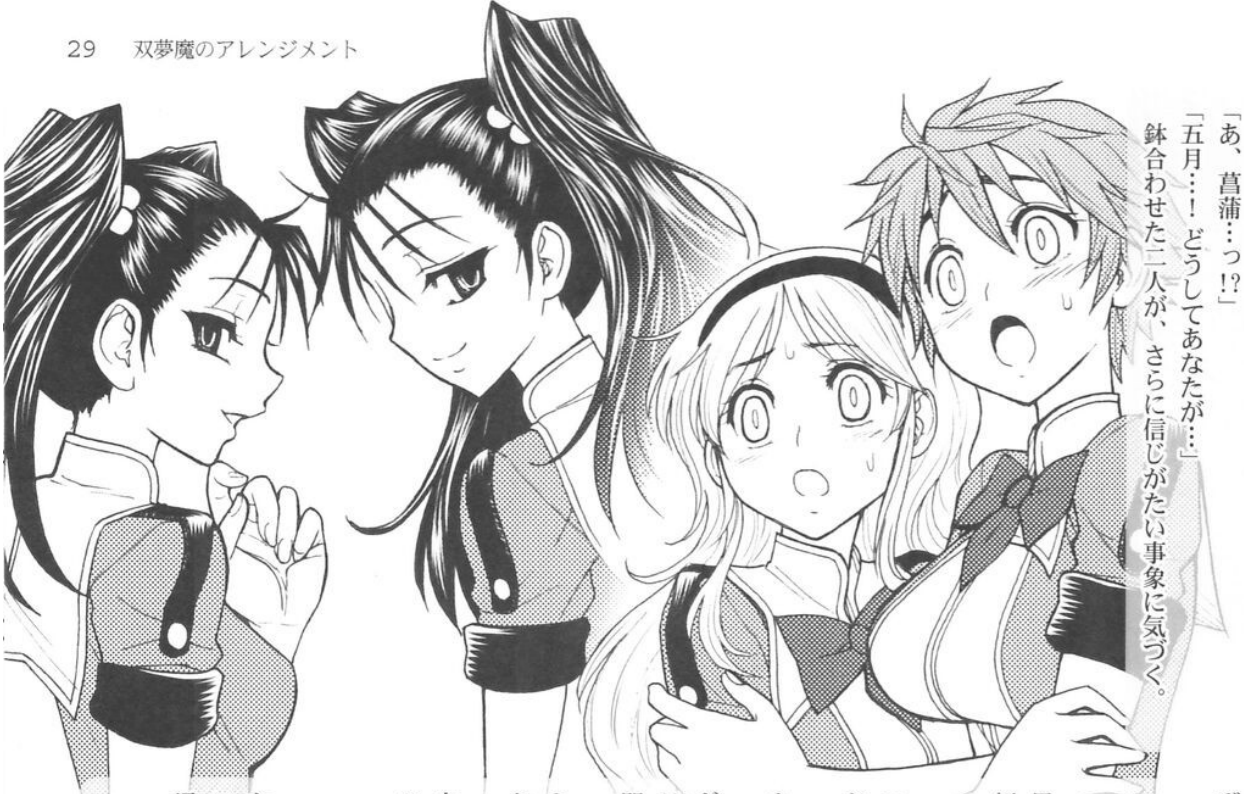
「は、はい…！ありがとうございます、菖蒲お姉様。では、どうかよろしくお願いいたします。裏門のところに、車を呼んでおきますので…」

深々と一礼して、沙羅が退室してゆく。――裏門、車。月子と同じシチュエーションに一瞬たじろいだ菖蒲だったが、強い決意が揺らぐことはなかった。

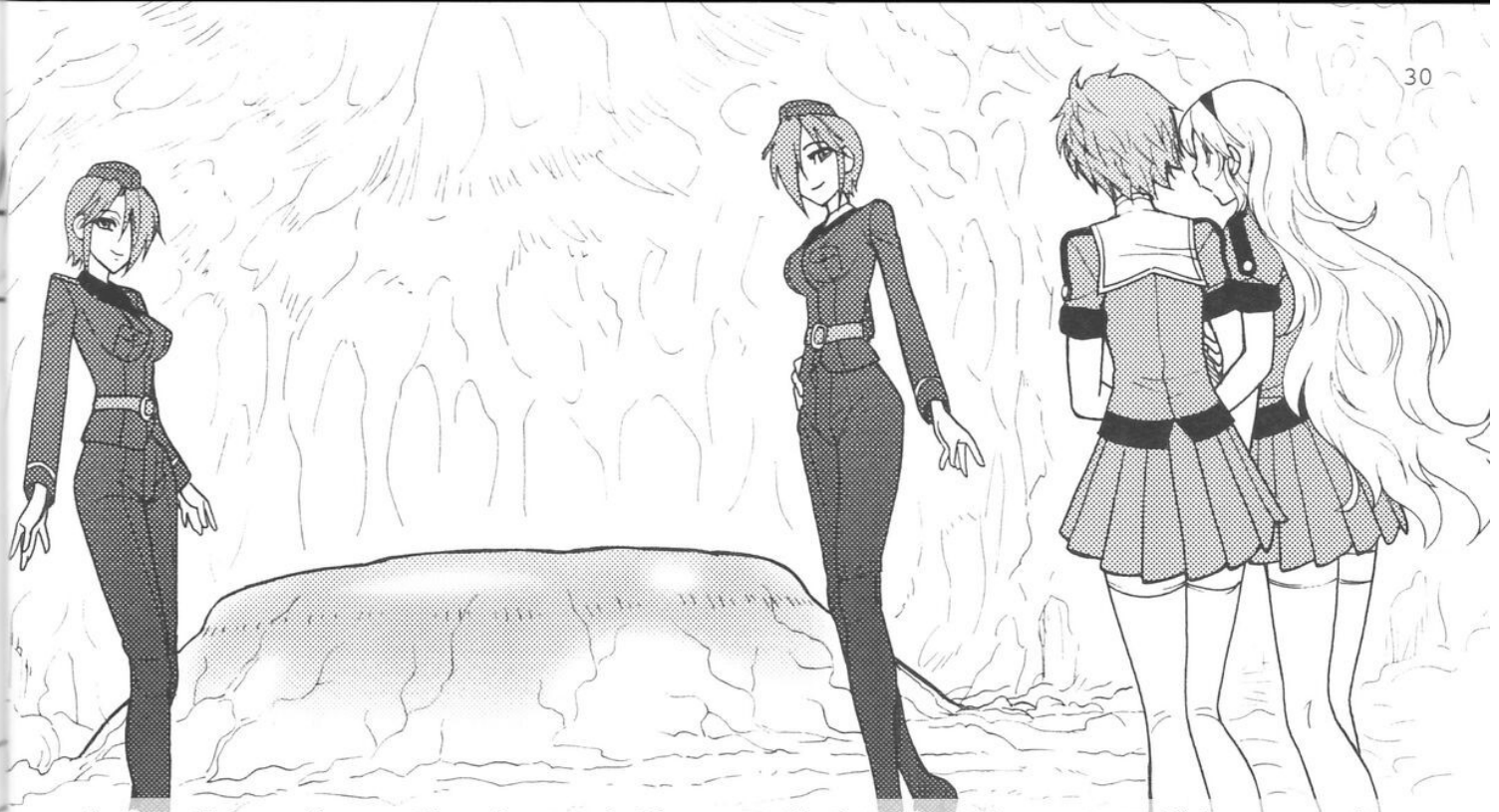


そして、ついに放課後が訪れた。

約束よりも少し早めに、菖蒲が姿を現した。先に裏門に来ていた沙羅が、軽く会釈する。ふたりは連れ立って、門扉の脇に駐車してあった黒塗りの高級外車に乗り込んだ。菖蒲は後部座席、沙羅は助手席だ。



「もうしばらくお待ちくださいね、菖蒲お姉様。すぐに、運転手が参りますから」
「え、えぇ…」
その直後である。裏門からふたつの人影が現れ、車窓の内と外から同時に驚きの声が上がった。
「あ、菖蒲…っ!?」
「五月…！　どうしてあなたが…」
鉢合わせた二人が、さらに信じがたい事象に気づく。
「さ、沙羅ちゃんが…」
「沙羅が、ふ、ふたり――」
五月の横にいるのは、沙羅。そして、助手席に座っているのもやはり沙羅だ。後から来た沙羅は、呆気に取られている五月をいきなり後部座席へ押し込んで、すかさず運転席に乗り込んだ。
「待たせたね、摩耶♪」
「いいタイミングよ、桐」
二人の沙羅はいつのまにか、魔法のように顔も服装も一変させている。明らかに双子と分かる風貌で、歌劇の男役を思わせる、すらりとした容姿の麗人だ。それぞれ顔の右半分と左半分を前髪で隠している。
「…あ、あなたたちは、いったい――」
「初めてお目にかかります。沙羅お嬢様の世話役を仰せつかっております、摩耶と」「桐、でございます。以後、お見知りおきを。麗しいお嬢様がた♪」
「そんなことを聞いてるんじゃありません！　い、いま…たしかに、沙羅の姿をしていたのに、それが――」
はっ、と何かに気づいた菖蒲が、あわててドアノブをガチャガチャと勢いよく動かしはじめた。それを見た五月も窓ガラスを力まかせに叩く。だが、もちろんドアが開くことはなく、音も外部には一切伝わらない。
「まぁ。はしたないですわよ、お嬢様がた。突然、そのようにヒスを起こされたりしては♪」「ふふ…そろそろ、おくつろぎいただいたほうが良さそうですわね」
月子のときと同様、無色透明の催眠ガスが後部座席に向けて噴き出した。たちどころに襲ってきた強烈な睡魔の前に、あえなく崩れ落ちてゆく生贄の少女たち。
「さ…つ、き――」
「あ…やめ…、こ…こんな――」
力尽きた獲物を、満足そうに見つめる摩耶と桐。濃密なガスが充満した車内で平然と呼吸しながら、ふたつの口唇が妖しく微笑む。そもそも双子は、対人用の薬物が通用するような存在ではなかった。
「うふふ…これで、合わせて3人。ようやく――」
「駒がそろったわね。さ、行きましょうか…♪」



それから、どれほどの時間が経ったのか。鼻をつく濃密な淫臭が、少女たちの意識を覚醒させた。

「――ようやくお目覚めのようね。五月、菖蒲」

「ようこそ、めくるめく夢のパーティー会場へ♪」

双子の声が、左右からうねるように響いている。ふたりは上体をどうにか引き起こし、頭をふらつかせながら、ぼやけた瞳で辺りを見まわした。

「…こ、ここは、いったい――」

「――さ…、五月…、なん…なの、これは――」

折り重なった臓物のようにうねる、血肉色の壁や天井。ヌメヌメと粘液に濡れ光る表皮が生温かく脈動する様は、巨大な生物の臓腑の内部そのものだ。

ふたりが知るはずもないが、そこは、確かにその前日、月子の排泄撮影が行われたはずの部屋だった。だが、かつて冷たい処置室だった痕跡など、いまやどこにも見出せない。肉壁の隙間のところどころに覗く薄汚れた白い壁に、かろうじてその名残を残すのみである。

「さぁ…ふたりとも、こっちよ。さっさとおいで」

「どうしたの、月子に会うために来たんでしょう？」

摩耶と桐の嘲るような声音が、少女たちの高潔な魂を再び奮い立たせた。柔らかく沈む肉床の気色悪さに閉口しながらも、双子に先導され一歩ずつ進んでゆく。部屋の中央には肉壁がひときわ高く隆起しており、近づくにつれて立ち込める淫臭が濃度を増している。間違いなく、そこがこの異界を生み出している源泉であろう。

やがて、カルデラ火口にも似たその内部が見えてくる。菖蒲が凍りついた悲鳴を上げたのは、その直後だった。

「――月子、さん…っ！　な…なんて、酷いことを…！」

たまらずに顔を覆い、五月の腕にすがりつく。そこには、変わり果てた月子の姿があった。

「お、お前ら…っ、よくも、月子ちゃんを…！」

拳を握り締め、双子を交互に睨みつける五月。怒りと哀しみが、美しい瞳を凛とした輝きで彩っている。

「おぉ、こわいこわい。でも、いいのかしら？　そんな反抗的な態度で」「月子がこの先どうなるかは、お前たち次第なのよ。それを、忘れないようにね…♪」



「く……っ」卑劣な脅迫に、五月が口唇を噛み締めた。
それにしても、肉体改造の進行が速すぎはしないだろうか。月子が監禁されてから、まだ丸二日も経っていないはずなのに――五月がふと抱いた疑念の解答は、双子の説明によって明らかになった。
「ふふ…ここはね、あわれな生贄から搾り取った夢の圧縮率に応じて、時間の流れを捻じ曲げることが出来る異界なのよ。たとえ一瞬のうたた寝であろうと、夢の内容が1週間なら1週間分――」「1ヶ月なら1ヶ月分。夢と同じ速度で、現実の肉体も変異してゆくの。あの娘が体感している淫夢の長さは、もう3ヶ月以上。つまり、ざっと百倍の早送りってわけね♪」
「そ、そんな…」
菖蒲の脳裏に、漢文の授業で習った故事成語が浮かんだ。邯鄲の夢――炊きはじめた鍋が煮上がりもせぬ僅かの間に、五十余年にわたる人生の栄華を夢で体験した男。だがもしその時間経過が、現実にも影響を及ぼすとしたら――まさに、悪夢どころの話ではない。
「まぁ、夢と現実の違いに、たいした意味なんて無いけどね。ひとたびそこへ堕とされた獲物に、目覚めの朝はもう二度と訪れないのだから」
「そういうこと。実体験すれば、すぐに理解できるわよ。永遠に続く夜夢の世界の素晴らしさを、ね♪」
文字どおり現実離れした光景を前に、立ちすくむ五月と菖蒲。その背後の肉床から、赤紫色にぬめった触手が音も無く這い上がり、ふたりに襲いかかった。
「きゃ…あっ！」「く…っ、放せ、この…っ！」
すべらかな肢体に絡みつく、グロテスクな軟体生物。身動きを封じられた五月の眼前で、菖蒲の身体を軽々と持ち上げると、強靭な膂力で強引に太ももを割り開き、制服を引き裂く。何ものにも穢されたことのない純白の股肉が、たちまちあらわになった。
「ひ…いっ、イヤぁあぁっ！やめて、ダメぇえっ！」
ぬらぬらと粘液を滴らせた別種類の触手。その先端が、菖蒲の秘部の中心に狙いを定める。その意図は誰の目にも明らかであろう。菖蒲はせめて凌辱の瞬間を視界に映さぬよう、きつく目を閉じるので精一杯だった。
「つ…あ…っく、ひぎ…いいっ!!」
体奥で内臓と異物がこすれ合う、身の毛もよだつ感触。混乱と恐怖の極みにある菖蒲には、自分がどの穴を貫かれているのかさえ認識できない。だが、脈々と注入されてくる生ぬるい粘液の経路と、増大してゆく腹部の圧迫感に、ようやく何が起こっているのかを理解した。
「助け…て、く、苦し…ぃ、お腹が、お腹が…あぁっ！」
挿入されたのは処女膣ではなく肛門で、しかも浣腸までされていたのだ。引き締まった菖蒲の下腹が、みるみる膨張してゆく。餌養母として経験を積んだ五月ならともかく、それはあまりにも容赦の無い肛辱だった。
「な――なんてことを…っ！やめろっ、菖蒲にそれ以上、手を出すなっ！こっちだ、こっちに来いっ！」



「あ…あぁ、五月…、見ないで、お、おねがい…っ」
五月の顔前に尻を突き出す姿勢を強制され、息も絶え絶えに悶絶する菖蒲。おぞましい魔液がもたらす強烈な便意は、とうに人体の限界を越えている。人前で排便し、あまつさえその排泄物を級友に浴びせるわけにはいかない——その誇り高い信念だけで、腸管が捻じ切れんばかりの蠕動を必死に押さえ込んでいるのだ。
「大丈夫だよ、菖蒲。ボクなら、ちゃんと目をつぶってる。それに…汚いなんて思うはず、ないじゃないか。菖蒲の苦しみを、ボクにも、受けとめさせて…♡」
思いやりに満ちた五月の言葉に、菖蒲は心底から救われていた。半泣きの微笑みで小さくうなずくと、緊張にこわばった肢体から徐々に力を抜いてゆく。
「あら、ダメよ五月。ちゃんと目を開けて、拡がっていく肛門の皺の隅々まで、じっくりと観察してあげなさい。麗しき生徒会長さまの、初めての公然脱糞なんだから」
「言うこと聞かないと…分かるわよね？ 痛い目を見るのはお前じゃなくて、お友達のほうだってことよ♪」
あまりの屈辱に、菖蒲の端正な眉が歪む。五月も苦々しく双子を睨みつけながら、要求に従わざるを得ない。

「ごめんね…五月、私…もう、ダメ…」
「菖蒲は悪くないよ。言ったでしょ、汚くなんかないって。菖蒲は、何も気にしなくていいんだからね…♡」
「五月…、あり…がと、う、はぅ…んふぅぅっ！！」
生まれて初めての強制脱糞に震える、未調教のあどけない肛蕾。全身を羞恥に染めて懸命に息む、旧知の少女。百合十字クラブでの糞宴に慣れている五月だけに、それはひどく新鮮で、煽情的な光景だった。

（あぁ…菖蒲ったら、お尻の穴をあんなに広げて…♡）
うっとりと瞳を蕩かせ、生唾を飲み込んでしまう五月。思わず肛門へと吸い寄せられてゆく口唇を、摩耶が横合いから押しとどめる。
「まったく、ウンチと見れば節操が無いんだから。物欲しそうに舌なめずりまでして——まぁ、さすがは餌養母と言うべきかしら」
「でも、これはまだ霊性の低い俗糞。摂取させるわけにはいかないのよねぇ。もうしばらく我慢なさい。どうせあとで、嫌というほど食糞できるんだから♪」
浣腸液の効果が持続しているのだろう、菖蒲の肛門は拡がりきって大輪の肉花を咲かせたまま、鮮やかに充血した腸肉をヒクヒクとほころばせている。
「さて…臭み抜きが済んだところで、仕上げといきましょうか。五月、菖蒲の尻穴を、舐め清めてあげなさい」
「餌養母であるお前の舌と唾液で、隅々まで丁寧にね♪これで、現実世界での下ごしらえは完了よ」
憎々しげに双子を一瞥したものの、五月は意外にも素直にうなずいた。舌先を躊躇なく伸ばし、菖蒲の敏感な肛腔へそっと触れさせる。
「ひ…んっ、ダメ、だめよ…五月、そんな…あぁ…」



「かわいそうな菖蒲――何の練習もなしに、お尻の穴をこんなになるまで、辱められて…、ぁむ、ん…ぷ」

五月の心はすでに、強引な肛辱に傷ついた菖蒲を少しでも慰めたいという気持ちで一杯だった。級友への想いを姫肛へ塗りこむように、どこまでも優しく情熱的に舌を這い回らせる。断じて、双子に強制されたからではない。自分自身の感情に従って肛舐奉仕するのだ。でなければ、菖蒲に対してあまりにも不誠実ではないか。

「はぁ、あ…っん、さ、さつ…き、はぅ…ん♡」



菖蒲も、思わず甘く濡れた溜息を洩らしてしまう。五月の口舌愛撫は、乱暴な触手などに比べ物にならない心地良さだった。痛々しくめくれ上がった腸肉が、餌食母の深い霊性に癒され、柔らかくとろけてゆく。いつしか菖蒲は、幼子に戻って母親に失禁の後始末を委ねているような、くすぐったい安堵感すら抱いていた。

「いい雰囲気になってるとこ悪いけど、それだけ舐めほぐせばもう充分よ、五月。あとは私に任せなさい♪」

少女たちの間に強引に割って入る桐。その下腹部にそそり立つ異形を目にして、五月の顔から血の気が引く。状況が見えない菖蒲を尻目に、桐はひとつ舌なめずりすると、すっかり挿入準備が整った柔肛へ、肉槍を一気に突き入れた。

「つ…ひ、あがっ…っはぁぁぁぁんっっ！

「ぐぅ…ンっ♪いい具合よ、菖蒲♡五月がグチョグチョに濡らしといてくれたおかげで、ほらっ、ほらっ♪こんなに激しく抜き挿しできちゃう♪」

桐がストロークを目いっぱい使って腰を打ち込むたびに、触手に吊り下げられた菖蒲の身体が、操り人形のように翻弄される。腸壁を荒々しく掻き混ぜる、固く熱い剛直。その圧倒的な質量が、初体験を肛姦で散らされたという現実を、菖蒲にこれでもかと実感させていた。

「いやぁ…っ、たすけて、助けて…五月…っ」

「菖蒲、菖蒲…っ！ ちくしょう、やるならボクをやれよ、卑怯者どもっ！ ボクが何でもする、何でもしていいから、お願い――、これ以上、菖蒲を傷つけないで…！」

「フフ…そんなに急かさないの。もちろんお前も、あとできっちり犯してあげるわよ♪」

「そういうこと。こっちにも、いろいろと手順ってものがあるのよ。せいぜい楽しみにしてらっしゃい♡」

そう言うと摩耶は、五月の髪を摑んで、M字開脚した菖蒲の股間へと顔を向けさせた。手つかずの可憐な秘唇が、肉ヒダのひとつひとつまで丸見えになる位置だ。

「さて、次は私が前からブチ込む番なんだけど、どうしようかしら。前戯もなしにいきなり処女を奪うか、それとも舌でたっぷり舐めて濡らして、挿れやすくしてあげるか。五月、お前に好きなほうを選ばせてあげるわ」

五月に選択の余地など無かった。屈辱に打ちひしがれながら、悲痛な面持ちで菖蒲の中心へと口唇を寄せる。

「ごめんね、菖蒲、ボク、こんなことしか出来なくて…」

「ひぅ…ん、いい…の、私の…あそこに、初めて…キスする相手が、五月で、ほんとうに…よかった――」

肛門よりもさらに丹念に、膣肉を舐めほぐす五月。精一杯の親愛の情が込められた懸命の愛撫が、絶望の淵にあった菖蒲を、温かく包み込んでいた。

「嬉しいでしょ、菖蒲。初めてのチンポ挿入がケツ穴で、しかもそのまま2本挿しで処女喪失だなんて。貞操観念ゼロの援交娘でも、なかなか体験できないわよ♡」

「温室育ちのお嬢様は、どんな乙女チックな初夜を空想してたのかしら？ まさか拉致されて親友の目の前でレイプだなんて、夢にも思わなかったでしょうね♪」

見事にタイミングの合った双子の抽挿。両穴を交互にえぐり抜かれ、菖蒲は息つくことも出来ない。

「な、何とでも…おっしゃい、ぁぐ、私に…触れたのは、さ、五月のほうが、先ですもの…っ、あなたがたが、その後で何をしようと、っくぅ、知ったことではありません、だって、私の心に残るのは、五月の…口づけの感触、だけなのですから…っはぁあンっっ！」

「あぁ…、菖蒲、菖蒲――」

この状況でなお気丈さを失わない菖蒲。その揺るぎない魂の美しさに、あらためて五月は胸打たれていた。

「クク…たいした強がりねぇ。まぁ、それで納得できるなら、好きにすれば？ どうせお前がその思い出を憶えていられる時間なんて、あとわずかなんだから♪」

「夢界へと堕ちたが最後、現実の記憶なんてそれこそ夢のように薄れて、儚く消えていってしまうのよ。夜の夢を、目覚めとともに忘れ去ってゆくようにね♡」

「さぁ…イってらっしゃい、菖蒲。永遠に終わることのない悪夢、めくるめく淫獄の闇の底へ――♪」

「狂おしい淫夢の泥沼に首までどっぷり漬かった月子が、よだれを垂らしてお前を待っているわ――♡」

前後で同時に達した双子の肉筒から、おびただしい量の精汁が両穴の最深部へと注ぎ込まれる。直後、耐えがたいおぞましさが菖蒲の胎奥に湧き起こった。粘液が内臓を溶かして溢れ出し、身体中に浸透して、脳髄までも蝕んでゆく感覚。月子が味わったのと同じものだ。

「ひぎ…いっ、いや、嫌ぁあぁ……っっ！」

非日常極まりない体験を続けざまに上乗せされた理性が、ついにオーバーフローする。視線をあらぬ方向へと彷徨わせながら、菖蒲はがっくりと意識を失った。

その頃、本物の沙羅はいつものように、放課後のミーティングのため生徒会室を訪れていた。昨日までもなく、菖蒲の姿はない。今まで、あの生徒会長が遅刻したことなどあっただろうか――沙羅がいぶかしんでいると、背後から話しかける声があった。

「あら――何も知らないの？　自分の飼い犬の行動も把握してないなんて、ずいぶん間抜けなご主人様だこと」

半開きのドアにもたれ、楓が冷笑している。

「い、いきなり何なのよ！　飼い犬って、いったい…」

はっ、と沙羅が息を呑んだ。

「楓、あんた――何を、どこまで知ってるの」

「何でも知ってるわよ、おバカさん。摩耶と、桐。あなたの世話役だったかしら？　車で来て、帰ってったわ」

「そ、それがどうしたっていうのよ。――え？」

「だから、例の外車で、連れ去って行ったって言ってるのよ。菖蒲お姉様のみならず、五月様までもね。そう…」

月子をさらっていったときと、同じように」

「な…んですって――」

「飼い犬に手を噛まれた気分はいかが？　まぁ、連中からしてみれば、心外な言われようかしらね。飼い犬になった覚えなんて、一瞬たりとも無いでしょうから」

あまりにも思いがけない展開に、沙羅は、楓の知った風な口ぶりを受け流す余裕すら失っていた。

「ウソよ、そんな！　どうして、摩耶と桐がそんなことする必要があるの！　理由を言ってごらんなさいよ！　そ、それとも――まさか私が命令したとでも言うつもり!?」

「フッ…少し落ち着きなさいな、誰もそんなこと言ってないわよ。理由を知りたければ、連絡して直接聞いてみたら？　あなたの忠実な飼い犬たちに、ね」

茫然とする沙羅を尻目に、楓はあっさりと立ち去った。沙羅はもう居ても立ってもいられず、摩耶たちの携帯に連絡を取る。しかし聞こえてきたのは、通話不能を告げる無機質なアナウンスだけだ。

続いて菖蒲の携帯にも発信する。こちらは圏外よりもなお酷い状況だった。アナウンスの音声が雑音だらけで、しかも近く遠くうねっているのだ。その合間に呪詛のような低い唸り声まで聞いてしまったところで、あわてて通話を切る。まるで、たちの悪いホラー映画だ。

月子を陥れ、楓たちを侮辱し、蹴落としたという達成感にすっかり浮かれきっていた沙羅は、いまや浴びせられた冷や水で、全身ずぶ濡れだった。

「…菖蒲さま、…菖蒲お姉さま――」

呼びかける声に、うっすらと瞼を開く菖蒲。どうやら、知らないうちにまどろんでいたらしい。固く握り締めた手のひらはじっとりと汗ばみ、心臓はトクトクと小刻みに脈打っている。何か、おぞましい悪夢にうなされていたような気がする。

「申しわけありません。起こすのは気が引けたのですが、ご注文のデザートを、お持ちしたものですから…」

声の主は、月子のようだ。ということは、また自慢のお手製デザートの相伴に与ったのだろうか。そういえば目の前のテーブルは、学院のテラスのものだし――

「い…いいのよ、気にしないで。私のほうこそ、ごめんなさいね。せっかくお誘い頂いたのに、居眠りなんて…。やだわ、私ったら――」

誘われたのかどうかも思い出せぬまま、話を合わせる菖蒲。記憶がはっきりせず、ふわふわと思考がまとまらない。まだ寝ぼけているのかと、二度三度かぶりを振り、あらためて月子のほうへ顔を向ける。

「つ…、月子さん、いったい――その格好は…」

菖蒲の眠気は、すっかり吹き飛ばされていた。

「え？どこか、おかしなところでもありまして？」

「ど、どこ…って、あの、そ、そんな――」

「ふふ…菖蒲様ったら、まだ半分、夢の中にいらっしゃるのかしら。ほら、よく思い出して下さいませ。私はいつも、この服を着ているじゃありませんか…♡」

自信たっぷりにそう言われると、どぎまぎしている自分のほうがおかしいように思えてくる。困惑する菖蒲を文字どおり尻目に、月子は平然とテーブルの上に身を乗り上げ、丸出しの尻たぶを菖蒲の顔前へと突き出した。

「さぁ、どうぞお召し上がり下さい。ご注文の、月子特製、ウンチムースでございます♡」

「な…、なん…ですって――」

あられもなく拡げられた股肉の中心でヒクヒクと息づく、見事に脱肛した秘蕾。あまりにも異様な光景を前に、菖蒲は魅入られたように動けない。

「どうされました？菖蒲様がどうしても食べたいとおっしゃるから、お腹いっぱい溜め込んで参りましたのに」

「そ…そんな、わ、私が…これを、注文したの…？」

「えぇ、もちろん。他でもない菖蒲様のご注文でしたから、それはもう腕によりをかけて仕込ませて頂きましたわ。さぁ、お早く…♡月子の脱肛アヌスをお口に含んで、直接お召し上がり下さいませ…♡」



呪文のように響く月子の言葉が、菖蒲の理性を塗りつぶしてゆく。こんなことをしてはいけないと分かっているのに、何故か、注文したメニューに口を付けないのは失礼にあたるという結論がまさってしまうのだ。思考を論理的に積み重ねてゆくことが、どうしても出来ない。

「あ…ぁあ、は、は…い、いただき…ます…っ」

ついに、菖蒲の口唇が肛管に添えられた。それを確認した月子が、陶然と微笑み、本格的な産糞を開始する。

「つく…ふ、ぁく…ん、う、ウンチ、出るぅ…っ♡」

なめらかな糞餡が、菖蒲の口腔いっぱいに詰め込まれてゆく。もちろん飲み込めるはずもなく、かといって吐き出すことも出来ない。本能的な嫌悪と淫夢の侵蝕とが、まだ菖蒲の意識の奥底でせめぎ合っているのだ。

「あむ…っぷ、ぇあ、おごごんをほぉごっ」

だがその停滞は、糞肉の味と香りを、菖蒲がずっと味わい続けなければならないことを意味していた。糞汁が舌に沁み込み、甘苦い芳香が鼻腔に充満してゆく。

「あらあら…いけませんわ、菖蒲様ったら。じっくりウンチを味わいたいのも分かりますけど、どんどんお食べにならなくちゃ。ほら——もう身体中に、ウンチが山盛りじゃありませんか♡」

自分で脱いだのか、あるいは脱がされたのか。菖蒲はいつのまにか、唐突に全裸になっていた。すべらかな白肌の上に、糞蛇がとぐろを巻いて折り重なっている。

「仕方ありませんね。食べきれなかった分は、お身体のほうで味わって頂きましょうか。本当は、ウンチエステは特別コースなのですけど…今回は、特別ですよ♡」

リズミカルに蠢く月子の指先が、媚糞を菖蒲の全身に塗り拡げてゆく。するとまるで美容液のように、素肌へと糞泥が溶け込んでゆくではないか。

「はぁ…っあ、つ、月子…さん、っく…んふぅ…っ♡」

錯覚ではない。じわじわと皮膚へ浸透し、体内に吸収され、細胞のひとつひとつが糞色に染まってゆく感覚が、はっきりと伝わってくるのだ。己の血肉が、かぐわしい妖糞へと文字どおり置き換わってゆく様を、菖蒲は茫然と見つめるしかなかった。



次に菖蒲が認識したのは、月子と同様に、変態メイド服を着用している自分の姿だった。カフェの客から給仕する側へと、役替わりしたということだろうか。月子の視線が、菖蒲の痴態を満足そうに舐めまわしている。

「約束しましたよね。ウンチを食べこぼしたら、ここで一生、糞ひりメイドとして働いて頂きます、って♡」

そうだ——たしか注文する前に、そんな話をした気がする。少なくとも菖蒲には、そうとしか思えなかった。

「えぇ…分かっています。約束は守りますわ。これから、いろいろ教えて下さいね、月子さん…」

「もちろんですとも。じゃあ早速、特製パフェの作り方から練習いたしましょうか。ね、菖蒲様♡」

そう言って、月子がガラス製の器を運んできた。

「さぁ、まずこちらに跨って、菖蒲様のお腹の中のウンチを、こんもりと盛り付けて下さいませ♡」

「あ…あぁ、そ、そんな…っ」

躊躇ってはみたものの、実のところ菖蒲は言われる前から、その命令をうすうす予感していた。月子が紡ぎだす糞辱の夢想に、同調しつつあるのだ。羞恥に頬を染めながら、姫股を割り開き、可憐な肛蕾を向ける。

「そうそう、その調子ですよ。きれいな一本糞をひり出せるように、力を緩めず息み続けて下さいね♡」

「は、はい…！ん…っく、ぁふ…っむうぅぅ…っ」

しっとりと練り上げられた糞餡が、つややかなチョコレート色の山を成してゆく。食器の中へ脱糞するという背徳感が、菖蒲の排泄快楽を芯までとろかせていた。

「うふふ…よく頑張りましたね。最初にしては、上出来ですわよ♡ では、仕上げにミルクをトッピングいたしましょうか」

「っはぁ…っ、はぁっ、み、ミルク…って——」

「決まってるじゃありませんか。女の子のおっぱい、母乳ですよ。さぁ、菖蒲様もご一緒に…♡」

「む——無理よ、そんなの、出るわけ、ない…」

「何をおっしゃいます。ご自分のお乳を、よぉくご覧になって下さいませ。ほら…いやらしい乳首をパンパンに勃起させて、いまにも弾けそうじゃありませんか♡」



胸元へと目を向けた菖蒲が息を呑んだ。もともと豊かに熟れていた乳房がさらに敏感を増し、乳牛のように肥大した乳首から、すでに乳汁が滲み出しているのだ。

「あ…あぁ…、私の、お…おっぱいが、こんな――」

手早く搾った母乳をまんべんなく糞果に浴びせた月子が、戸惑う菖蒲の乳首を柔らかく握り締めた。

「ね、問題ありませんでしょう…？　このおっぱいでしたら、濃厚な生ミルクを、たっぷり搾り取れますわ♡」

百合十字クラブでの経験を、身体が憶えているのだろう。慣れた手つきで、リズミカルに搾乳する月子。たちまち菖蒲の乳頭から、やや黄色身がかった粘り気の強い初乳が、勢いよく噴き出した。

「っはぅ、ん、ぁ…ぐ、ひぁ…っはぁあぁあンッ！」

射精と同様の快楽に脊髄を貫かれ、菖蒲のしなやかな腰が弓なりに仰け反る。まともな射乳でない証拠に、乳管口の構造を無視したひとすじの太い乳流が、水鉄砲のごとく放たれている。この糞夢の世界では、月子の淫猥な妄想こそが、絶対の摂理であった。

「いかがですか、菖蒲様。以上が基本のウンチパフェの作り方です。ではさっそく、試食してみましょうね♡」

スプーンで捏ね混ぜた糞餡と練乳をひと匙すくいとり、月子はまず自分の口へと運んだ。舌で丹念に攪拌し、菖蒲の初々しい糞肉の味と香りを、心ゆくまで堪能する。

「あぁ…♡　さすがは菖蒲様のウンチ、なんて上品な味わいなのかしら。さぁ、菖蒲様も、どうぞひと口…♡」

「ぁむ、んぷ…うふぅ…っ、こ、これが、私のウンチの味…！　苦くて、甘臭くて、頭が変になりそう…。あぁ…でも、どうして…？　すごく、すごく美味しいわ…♡」

禁断の食糞行為を、すんなりと受け容れてしまう菖蒲。一緒に作り上げたデザートを食べる嬉しさの感情が極端に増幅され、論理的な思考を遮っているのだ。

「はむ、ん…ぅぷ、ぁは…ぁ☆ウンチ、美味しいの…♡　月子さん、もっと…もっとウンチ、食べさせて…ぇ♡」

陶酔しきった瞳をうっとりと揺らめかせながら、生ぬるい糞夢の底へずぶずぶと沈んでゆく菖蒲に、もはや逃れる術はなかった。



ぬめぬめと蠢く赤紫色の肉壺に抱かれ果てしない夢を見る、肥大したふたつの肢体。妖美なる淫夢がもたらす肉体変異は、驚異的な速度で進行しつつあった。

「さすが、給餌妹の妄想が描く夢ね。あんなにプライドの強かった菖蒲が、もうすっかり取り込まれてる」

「ほんと、月子の変態度には感服するわ。清楚な顔して、考えてることは誰よりもえげつないんだから♪」

「あ…あぁ…っ、月子ちゃん、菖蒲――」

ついにその毒牙を餌養母・五月へと突き立てた、摩耶と桐。生贄の少女たちが変貌してゆく様を見せつけながら、濡れそぼった極上の肉穴を前後から嬲り尽くす。

「はぁ…っ、これが、餌養母のケツ穴……！直腸の奥までとろけきってるのに、すっごい締めつけだわ…♪」

「おまんこも、チンポに吸い付いて放さないわよ♡精液が欲しくて欲しくて、仕方ないみたいね…！」

「まったく、どれだけチンポをハメ狂ったら、こんなエロ穴に仕上がるのかしら…♪」

「クラブの連中もご苦労なことね。私たちのものになるとも知らず、みっちり調教しといてくれるなんて♡」

「まぁ、これからは私たち専用の聖糞製造機として、永久に霊力を供給し続けてもらうわけだけど♪」

「チンポの形が馴染んで、精液の臭いが抜けなくなるまで、たっぷり使い込んであげるわ。覚悟なさい…♡」

「っ…ぐぅ、そ、そんなの…絶対、許さない…っ！ボクは、留奈や、みんなのための、餌養母だ…、お前らのものになんて、死んでも、なるもんか…っ！」



「ウフフ…いつまでそうやって、意地を張っていられるかしらね。言ったでしょ、終わりのない夜の夢の中でなら、現実の時間進行を無視して、糞宴を休みなく続けることも可能となる――」

「つまり、まだるっこしい儀式を毎日毎晩、いちいち餌養母と給餌妹を集めて規則正しく執り行なう必要が無くなるってわけ♪これがどういう意味だか、分かる？」

「通常なら数十日かけて養糞循環させるところを、たったの数時間で霊性を凝縮し、抽出できるってことよ」

「クラブのお仲間がコツコツ溜めた霊力なんて、あっという間に抜き去っちゃうでしょうねぇ♪」

「そうなったら最後、誰がどんな秘術を尽くそうと、この夢界に介入することは不可能となる。私たちこそが、新たな餌養母システムの、所有者になるのよ…！」

「さて――そろそろイかせてあげるわね。死ぬことさえ許されない、夢のような悪夢の世界へ…♪」

「哀れなメス豚どもが紡ぎ上げたドロドロの淫夢を、存分に堪能するといいわ。さぁ、イってらっしゃい…♡」

「はぁっ、っはぁ…っ、ひ…ぃ、いや…っ、イヤだ、やめて…ぇ、あぐ、っうぁ…はぁあぁあぁンンッッ!!」

三たび繰り返される、膣腔と肛穴への同時種付けの儀式。胎奥へと溢れ出した濃厚な白濁液の奔流に押し流され、ついに五月の意識までもが、重苦しい夢の闇の底へと堕ちていった。

《つづく》

あとがき

というわけで、オフセット本の刊行は実に１年８ヶ月ぶり、お久しぶりのジャム王子です。
あいかわらずバタバタした状況のあとがきです。たまには余裕を持って〆切りを迎えたいものですが…。

なんと前作から、２年半以上も経ってしまいました。マイペースにもほどがある。
たまにイベントで続編を希望する声もいただいてたのですが、こんなにお待たせしてしまって本当に申しわけありません。
絵柄やキャラデザもだいぶ変化してて、並べて見るとまるで別人。沙羅のツインテなんて初期デザイン完全無視してるし、少しは以前の原稿を見ながら作業しろって話ですよ、まったく。
しかしまぁ、長年の懸案事項にようやっと手を付けることが出来たのは何よりです。
個人的に、沙羅の物語には決着をつけねばという思いを、ずっと引きずってたもので。
１作目でイジワルな敵役として登場したものの、エロにも物語にも絡まずじまいでしたから。
つっても、今回またしてもエロシーンは無し。それどころかオッパイすら見せてない！
沙羅メインのエロシーンは、後半までおあずけとなってしまいました。
後半の構成はもう出来上がってるので、今度こそすぐに発行します。誰よりもオレ自身が、早いとこスッキリさせたいので。

どうもこのところ、作品が長編化してしまう傾向があります。
今回もネーム切ってたら、いつのまにか全体で７０Ｐを越える事態に。あわてて前後編に分けましたが、あのままだったら確実に間に合わなかったでしょう。
作業量が増大する一方なのは肉体的にも集中力的にもキツいので、いいかげん何とかしたい気持ちはあるのですが…とはいえ、風呂敷を好きなだけ拡げられるのもオリジナル同人の良さですし、筆にまかせて進むしかないか、とも思いますが。

１作目では文・hermit_gelさん、絵・ジャム王子でしたが、今回gelさんには原案協力という形でサポートをお願いし、ストーリー構成はこちらに任せていただくことになりました。
もともとこちらからお誘いした作品なのに、いまさらの身勝手な要求を快く受け容れて下さって、本当にありがとうございます。自分が相当の頑固者だというのは分かってたつもりだったんですが…いろいろとご迷惑をおかけしました。

さて、そろそろ時間も差し迫ってきましたので、このへんで。
とにかく次作は今回の続きをすぐ発行、そんでもってその先も、飽きもせずふたなりレズスカ作品を作り続けてゆきますので、お好きな読者の方はどうぞ末永くお付き合いいただければ幸いです。

ちなみに１作目「聖アルルナ女学院　黄金の百合十字クラブ」ですが、オフセット本の完売に伴い、デジタル作品に再編集したものを販売しています。こちらは在庫切れの心配はありませんので、よろしければイベント、委託書店、ダウンロードショップ等にてお買い求め下さい。

双夢魔のアレンジメント　聖アルルナ女学院②

2009.8.16発行
発行　ジャム王国　発行人　ジャム王子

印刷　ねこのしっぽ

聖少女たちが夜ごと甘やかな姫糞を捧げ合う
禁断の楽園「黄金の百合十字クラブ」に
妖麗なる双美人の魔手が忍び寄る。
次々と姦計に堕ちてゆく雌贄たちを
待ち受ける、狂艶の淫夢とは――。
「聖アルルナ女学院」シリーズ第２弾。